聖華快楽書店

R18 ADULT ONLY

~愛と正義のヒロインが敵幹部に快楽に堕ちるまで~

洗脳調教され

魔法少女ヒロイン リィ

ADU
原案：エルトリア
イラスト：なまひゆ、kageli

リリィフレア



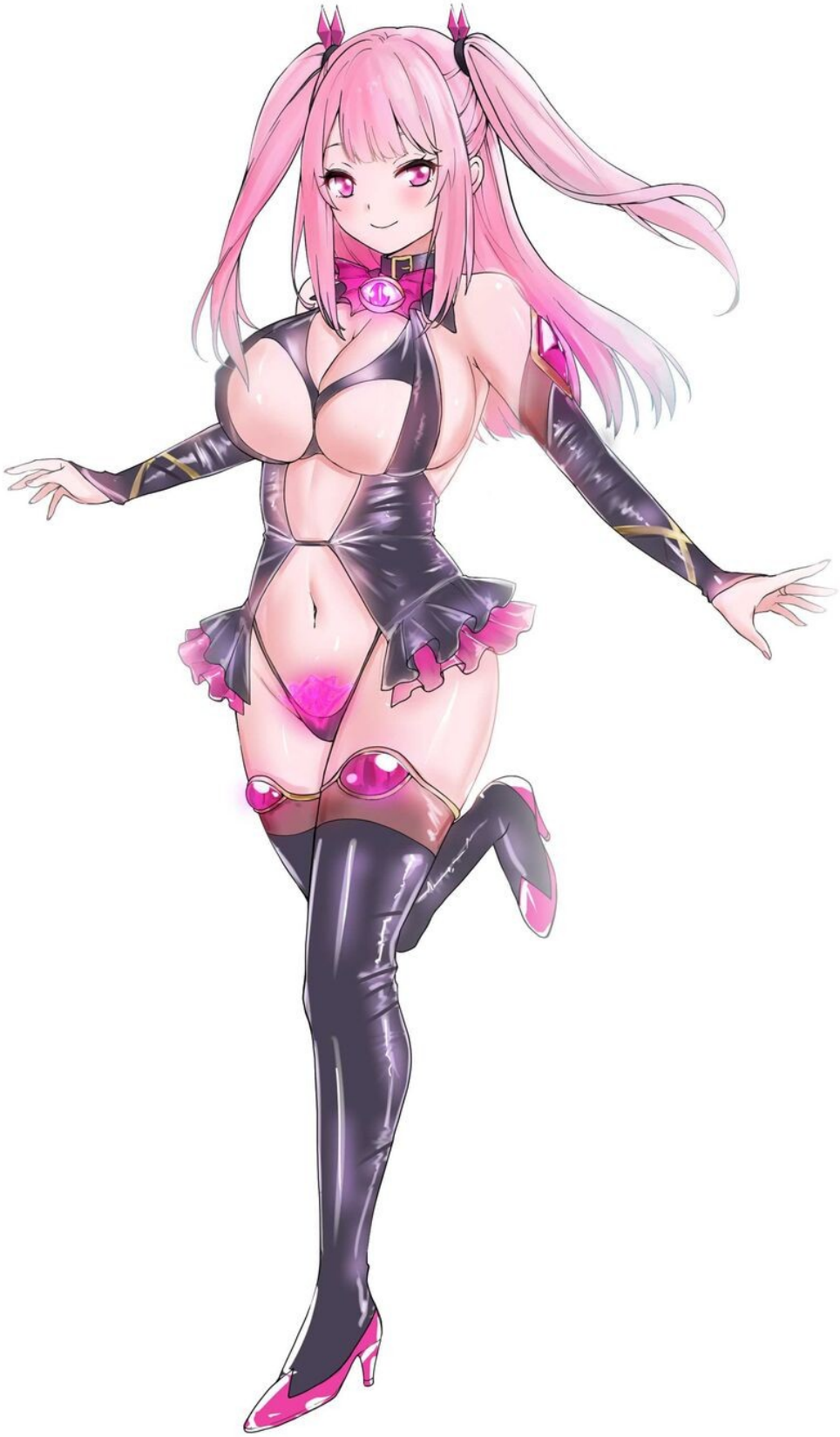
リリィマリン




















聖華快楽書店
R18
ADULT
ONLY
～愛と正義のヒロインが敵幹部に
快楽に堕ちるまで～
洗脳調教され
淫乱少女
セイントリィ
ADU
原案：エルトリア
イラスト：なまひゆ、kageli

リリィフレア



リリィマリン



◆シーン1

――日本、関東の某県に位置するとある街。
何の変哲もない、という枕詞をつけても誰も文句を言わないであろう街の駅前広場の中心で、この日も光と闇の戦いが繰り広げられていた。
「フレアプロミネンス！」
「マリンストリーム！」
高らかに発せられた二つの声。まだ幼さを残したその声は、まるで女児向けのアニメ作品の技名のようだった。
そうまるで、魔法少女の魔法のような。
だがその表現は正確ではない。のような、という表現は蛇足なのだ。
なぜならそれは、正真正銘、魔法少女の魔法なのだから。
生み出された赤の光は太陽のような灼熱の炎を、青の光は大嵐のような水の奔流となって、怪物の身体を貫いた。
「ぐあああああああっ！」
聖なる魔力を帯びた二つの光条に貫かれた異形の巨体は、断末魔の声を残して崩れ去ってゆく。
魔法という存在が、フィクションの中にしか存在しなかったのはもう過去の話だ。
魔法界と呼ばれる異世界とこの世界を繋ぐ門（ゲート）が開くようになってからというもの、様々な人や組織がこの世界へとやってくるようになった。

魔法が存在しないにもかかわらず、科学技術だけでここまで発展したこの世界を、あまたの世界の悪の組織が放っておくはずもなく、この世界はたちどころに侵略者たちに狙われた。

いかなる科学技術も、異世界の魔法の前には為す術もなく、最新鋭の戦車や爆撃機すらも、侵略者の暴力の前に破壊されていった。

世界は侵略を受け入れるしかないかと思われていたそのとき、救い手は現れた。

魔法界の秩序を司る賢者たちが、この世界の人間に魔法の力を授けたのだ。

この世界の住人の大半は魔法を扱う適性を持たない。そんな中で、穢れのない心を持った十代の少女たちだけが、聖なる力を用いて魔法を使うことができた。

そんな少女たちを、世界は魔法少女と呼んだ。

今、怪物を浄化させたのも、その一人――いや、二人。

一方は、ピンクを基調とした魔法少女。燃えさかる炎のようなツインテールを風に揺らし、あどけない顔立ちには見ている方まで元気が湧いてくる、太陽のような笑みを浮かべる彼女はリリィフレア。

一方は、水色を基調とした魔法少女。艶やかな長髪に、華奢な肢体。大人びた美貌が氷の彫像のような彼女はリリィマリン。

「くぅっ……またしてもあたしの邪魔をっ！」

バチィンッ、と。怪人の背後に控えていた女性が、その手に持った鞭を路面に打ちつける。

配下の怪人を失って、エキゾチックな美貌を悔しげに歪める女性はネビュラ。

モデルのようにすらりと伸びた肢体を黒革のボンデージで包み込んだその姿は、男女を問わず惹きつけ堕落させる、食虫花のような妖しげな色香を帯びている。

それもそのはず、彼女こそがこの世界のあらゆる人間を淫欲に溺れさせることを目論む悪の組織、ネビリムの使徒の一員にして、この街の侵略を一手に引き受ける幹部である。

「さて、どうするのネビュラ？　頼みの怪物は今日も倒しちゃったけど？」

「そろそろ観念してお縄についてくれませんか？」

「くっ……魔法界の賢者（ババア）どもに力をもらったからって調子に乗ってっ……」

真珠のように白い歯を、今にも砕けそうなほどに軋ませてから、ネビュラは手に持った鞭を振るった。目的はセイントリリィの二人ではない。

パシィンッ、と鞭が虚空を打ったかと思うと、空間の歪みが生まれ、ネビュラはそこに飛び込んだ。

「覚えてなさいっ！　次こそっ！　次こそは、アンタたちを色狂いの淫乱ビッチに変えてやるんだからっ！」

品のない捨て台詞を残して、空間に生まれた歪みは消えた。

歪みを利用した移動をするために、何度戦っても本拠地が一向に見つからず、対処法的な戦い方しかできずにいる。

二人は口惜しさを感じながらも、改めて周囲に目を向ける。

怪物の登場によって避難していた人々や、遠巻きに見ていた人々が駅前に戻ってきていた。

「ネビュラおばさんもいなくなったことだし、いつものやろっか」

「はい」
フレアの言葉に、マリンも頷く。二人は同時に息を吸い込むと、街の人々に向けて口を開く。今日もまた、自分たちは勝ったのだと、心配する必要はないのだと、勝ちどきを上げるように。
「私たち、セイントリリィがいる限り！」
「ネビリムの使徒の好きにはさせません！」
声高な宣誓にあわせて、二人はポーズを決める。
リリィフレアとリリィマリン、二人揃って魔法少女セイントリリィ。
それがこの街を守る、可愛らしくも力強い絶対の守護者の名前だった。

＊

ひとけのない場所まで転移すると、二人の身体を包んでいたコスチュームが光の粒子になってほどけてゆく。
光が完全に消えたときには、そこにいたのは二人の魔法少女ではなく、セーラー服姿の、ごく普通の少女たちだった。
変身を解除したところで変わるのは衣装だけ。顔立ちや体型は何も変わらない。しかしそれだけで、誰も二人がセイントリリィであったことを認識できなくなる。
魔法少女のコスチュームには人の認識をズラす魔法がかけられている。
この世界の秩序は彼女たち魔法少女たちによって守られている。

異世界からやってくる様々な組織に対抗することができるのは、同じく異世界由来の力を持つ魔法少女たちだけなのだ。

しかし同時に、彼女たちがまだ年端もゆかぬ少女たちであることも事実。

魔法少女の正体が悪の組織に知られれば、魔法少女たちは常に自分や、周囲の人々にいつ危害が及ぶかわからない。それでは気の休まる暇もない。

そのような理由から、魔法少女たちにはそれぞれ魔法名が与えられ、正体を探ることは法律でも禁止されている。

「お疲れ様っ、まりな」

「ほむらちゃんもお疲れ様です」

太陽のような笑みを浮かべるフレアこと神崎ほむらの言葉に、マリンこと雨宮まりなも微笑みを浮かべて頷きを返す。

「まりな、どうかしたの？」

親友の柔らかな微笑みの奥にわずかな懸念があることを、ほむらが敏感に察して問いかける。

まりなは一瞬、自らの懸念を話すか隠すか迷うような素振りをみせたものの、すぐに首を横に振った。

「ほむらちゃんには敵いませんね」

「何か心配事があるんだったら、私でよければ聞くけど」

ほむらのまっすぐな眼差しに貫かれて、まりなは嬉しそうに頬を綻ばせながら頷く。

「本当に、大したことではないんです。ただ、少し不安になって」

「不安って、なにが？」
「なんだかとっても嫌な予感がするんです。胸騒ぎがするというか……ネビリムの使徒だって馬鹿じゃないでしょう。こんなに毎回あっさりと負け続けていたら、いつか何かしてくるんじゃないかと思って……」
「そうかな？　アイツらって前からあんな感じだよ？」
ほむらの言葉は根拠がないようでいて、経験に裏打ちされたものでもある。
魔法少女になってまだ一年足らずのまりなと違って、ほむらは既に魔法少女を三年も続け、いくつもの悪の組織を蹴散らしてきたベテランなのだ。
そのほむらに気にならないと言われてしまうと、途端に自分の感じた不安が気のせいのようにも思えてくる。
「正面から戦ってるうちは大丈夫だと思います。でも――」
「なにか卑怯な手を使ってくるかもしれないってこと？」
「はい……」
「大丈夫だよ」
あまりにもあっけらかんとしたほむらの言葉に、まりなは目を丸くする。
「まりなと一緒なら、どんな卑怯な罠だろうと乗り越えていけるもん」
そう言って、ほむらはまりなの手を取った。
重ねられたてのひらから、温かい熱が伝わってきて、不安に冷えていた心が温められてゆく。
「ほむらちゃん……」

「だから心配いらないよ。セイントリリィは無敵の魔法少女なんだから」
「そう、ですね……わたしも、ほむらちゃんと一緒なら、誰にも負ける気はしません」
重ねられた手を、まりなもまた握り返す。
自分の温もりが、ほむらに伝われば良いと思いながら。

◆シーン2

まばらな照明に照らされる薄暗い廊下に、足音が響く。
硬いヒールが石造りの床面へと憎悪すら感じる勢いで打ちつけられる。
足音の主は、艶やかな金髪を帯びたボンデージ姿の女性――ネビリムの使徒の上位使徒であるネビュラであった。
今日もまたセイントリリィに敗北を喫した彼女は、大人げもなくその苛立ちを吐き出し続ける。
「あぁっ！　もうっ！　あのクソガキどもっ！　何度も何度も何度も何度も、あたしの邪魔ばっかりしてっ！」
自らの言葉で屈辱の記憶が蘇り、真珠のように白い歯が、ギリリと軋みを上げる。その表情からは、屈辱と憎悪の感情がありありと感じられた。
「このあたしが……ッ！　小娘なんかに手玉に取られるなんて……！」
ネビュラがセイントリリィに敗北を喫したのはこれで二度や三度ではない。
「次こそは絶対にあの小娘たちを快楽の虜にしてやるんだから……！」
「無理だな」
闇の奥底から聞こえた声に、ネビュラはビクリと身体を震わせた。
「ネッ、ネビリム様っ！　申し訳ありませんっ！」
咄嗟にネビュラは、額を床に擦りつけんばかりの勢いでその場に平伏した。
声の主はネビュラたちネビリムの使徒が信奉する存在――淫堕神ネビリム。

かつては複数の世界を支配した偉大なる淫堕神はしかし、魔法界の賢者たちの手によって封印され、今となっては思念体として、自身を崇拝する使徒たちにその意思と、わずかばかりの力を授けることしかできない。そんな状態のネビリムだが、それでも圧倒的な力を有していることは事実だ。

現に、こうして思念体を飛ばして直接会話ができるだけでも、他の淫堕神の追随を許さないほどの影響力を持っているのだ。

「あの小娘たちに負けるのはこれで何度目だ？」

「ッ……も、申し訳っ……」

ネビリムの言葉に、ネビュラの顔色は蒼白になり、身体を小さく縮こませる。女豹のような肉体美も、まるで仔猫になってしまったかのように小さく、震えていた。

ネビュラが恐れているのはネビリムの怒りではない。ネビュラは使徒の中でもひときわネビリムへの忠誠心が厚い。ネビリムのためであれば己の命を捨てることも躊躇いはしない。たとえネビリムに殺されることがあろうとも、それを受け入れる覚悟はある。

本当にネビュラが恐れているのは失望されること。敬愛するネビリムから、期待してもらえなくなることだった。

「お前が誰よりも我に忠実なしもべであることはよくわかっている」

「ネビリム様……」

主人の寛大な言葉に、ネビュラは瞳を潤ませ顔を上げた。

「次こそは必ずやあの小娘どもを犯し尽くし、快楽漬けにしてみせます！」

「無理だと言っているだろう。お前ではどれだけ繰り返そうと奴らには勝てぬ」

「で、では一体どうすれば……」
「簡単な話であろう？　奴らに勝てぬというのならば――」
ネビリムの言葉を最後まで聞いて、ネビュラはつい先ほどまで青ざめさせていた唇を笑みの形へと歪めた。

＊

朝。
ホームルームのはじまる数分前の教室は喧騒に包まれていた。
特別何かがあったわけではない。既に時間は遅刻も間近、大部分の生徒は教室に着いている。放課後に何をして遊ぼうか、何時間目の授業が億劫だ、昨晩見たバラエティが面白かった――そんな何気なく、とりとめもない言葉が無秩序に交わされ、学校の教室という場を形作っていた。
ガラガラッ、と。教室前側の扉が勢いよくスライドレールを滑り、ツインテールの少女が駆け込んでくる。
「セーーッフ！」
駆け込んできたのはほむらだ。音がした一瞬こそ思わず視線を向けていたクラスメイトたちも「なんだ神崎か」と毎日恒例の行事を確認だけして各々の会話に戻っていく。
いつでも元気いっぱいのほむらにも弱点はある。そのひとつが朝なのだった。
クラスのほとんどがほむらから興味を失う中でただ一人――雨宮まりなだけは、ほむら

のことを見つめていた。ほむらもまた、それに気付くと、にこりと明るい笑みを返す。
「まりなっ！」
ほむらは足早にまりなの隣の自分の座席に着席すると、すぐさままりなに正対する。
「なにか……あったんですか？」
「お願い。まりなの力が必要なの」
その真剣な眼差しを見て、まりなは胸の奥がきゅん、と熱を帯びたのを感じた。
その瞳にもっと見つめられたい。その視線を独り占めにしたい。
そんな内なる欲求を、しかしまりなは首を振って振り払う。
「……ネビリムの使徒ですか？」
周囲の様子を伺って、まわりに聞こえないような小声でまりなは問いかけた。幸いなことにこの時間、ざわついた教室内ではよほど大声で喋らなければ会話が聞かれる心配もない。
二人が魔法少女であることは、当然のように学校の皆にも秘密。もしその秘密が漏れてしまえば、二人だけでなく、周囲の人々にも危害が及ぶ可能性があるのだから。それゆえに声を潜めたまりなだったが、ほむらの反応はまりなの予想とは真逆のものだった。
「えっ？　全然違うけど」
「えっと、それじゃあ一体何が……」
まりなの頭の中を駆け巡るのは、様々な予測だった。
怪我。病気。事故。それもほむら本人とは限らない。兄弟姉妹はいないはずだが、両親や祖父母、近所の人や、学校の友達という可能性もある。

あるいは――告白だろうか。告白されて、どのように返事をすれば良いのかわからないのかもしれない。

（ありえそうですよね……ほむらちゃん、可愛いですから……だけど――）

ほんの一瞬、胸を締めつけるような軋みが生まれたことを無視して、まりなはほむらの手を握る。

「わたしにできることであれば協力します。なんでも言ってください……友達、ですから」

口にするには照れくさい言葉。しかしそれを口にしたことに、まりなは後悔しなかった。じんわりと、胸の中に温かい気持ちが広がってゆく。

「ありがと。私、まりなが友達で良かったぁ」

「それで、お願いとはなんですか？」

「しゅ……」

「しゅ？」

「宿題、見せてください……」

「え……？」

ほむらの口にした言葉の意味が、一瞬まりなにはわからなかった。

あまりに深刻なほむらの表情と、言葉とが結びつかなかったのだ。

「一時間目の英語の宿題あったの、今さっき思い出しまして……」

説明をしながら青ざめてゆくほむらの顔を見ながら、まりなはようやく自体を呑み込むことができた。百面相のようにころころと変わるほむらの表情に、まりなの頬も緩む。

「えっと……見せるのはいいですけど、宿題は英作文ですよ？　それなりに長いですし、

さすがに写したらすぐにわかっちゃうと思いますけど……」
「えっ……うそぉっ……いやっ、それでも忘れましたって言うよりいいはずっ！」
「いえ……多分、正直に忘れたって言った方がいいと思いますよ？」
二人が話しているうちに、朝のホームルームのはじまりを告げる鐘が鳴る。
魔法少女たちにも日常はある。
遅刻ギリギリで家から走ってこなければならないこともあれば、宿題を忘れて怒られることもある。決して良いことばかりの日常ではないかもしれない。
それでも、掛け替えのない日常であり、二人にとって、魔法少女という危険な役目を負ってでも、守りたいものなのだった。

＊

ほむらとまりなは自他共に認める大親友だ。
家族にさえも話すことのできない、魔法少女という秘密を共有するたった二人の仲間であり、お互いに命すら預けられる信頼を持っているのだから当然とも言える。
昼ご飯を食べるときはいつも一緒だし、クラス内で二人組を作れと言われれば二人で組を作る。そんな二人であっても、二十四時間常に一緒に行動しているというわけではない。
そして悪の組織は、そんな二人の都合などお構いなしに現れる。
この日もまた、二人が一緒にいないときを見計らったようにほむらのスマートフォンが振動した。

表示される通知はセイントの輪と呼ばれるコミュニケーションアプリのもの。
不自然にならないようアプリのかたちをとってこそいるものの、一般に流通しているものではなく、魔法少女たちが魔法界からの指示を受け取るためのものであり、たとえ電波が通じない場所であったり、本体の電源が切れていても機能する優れものだ。
表示された文面は、公園にネビリムの使徒が現れたという事実と、そこへ向かうことをセイントリリィに指示するものだった。
通知のあった公園までは、ほむらの現在地からは五分とかからない場所だった。
「まったくもう、こないだもあれだけこらしめてやったのに、懲りないんだからっ！」
突然の呼び出しにも、ほむらはわずかばかりも面倒などとは思わない。魔法少女としての力を与えられたときから今に至るまで、ほむらはただ、胸の中の正義の心に従っているだけなのだ。文面にしっかりと目を通すよりも早く、ほむらはもう走り出していた。
まりなが到着するのを待つつもりはない。
（だって、まりなが到着したときに、自分を待ってたから被害が増えたなんて思ったら、まりなは絶対責任を感じちゃうもん）
二人揃ってこそ無敵のセイントリリィであるものの、一人一人の強さでも、そこらの怪人に遅れはとらない。相手がこれまで幾度となく黒星をつけてきたネビリムの使徒ともなれば、ほむらが楽観するのも当然といえた。
「セイントエナジー・メイクアップ！」
疾走でわずかに上がった息のまま、ほむらは変身の起句を叫びあげる。
魔法界の賢者より授けられた光の力がほむらの身体を包み込み、今着ている衣服を光へ

と還元、魔法少女のコスチュームをまとわせる。
光が尾を引いて軌跡を描くその先端で、ほむらはリリィフレアへと変身を完了していた。
走る速度は何倍にも加速し、アスファルトを踏み切る一蹴りで十メートル以上を駆けてゆく。
「そこまでよ！　ネビリムの使徒！」
「あら……来たみたいねぇ、リリィフレア」
「ネビュラっ……アンタよくもまた懲りずに……いつもどおり吠え面かかせてやるんだから！」
「今日はいつものようにはいかないわよ。ほら」
ネビュラは鞭で虚空を打つと、生まれた空間に手を入れ何かを取りだす。
それが何か――否、誰なのか、フレアには一目でわかった。
「っ……マリンッ！？」
リリィマリンは眠らされているのか、フレアの声にも反応を見せず、ネビュラの腕の中で人形のようにぐったりとしている。
「くっ……卑怯者っ……人質なんてっ」
今までにも、人質を取られたことはある。だがそのときにはマリンがいた。二人ならば人質を救出しつつネビュラを撃退することができた。
ほんの一年ほど前までは一人で戦っていたのに、改めて自分がどれだけマリンに助けられていたのかを理解する。
「ふふん、いつまで強気な態度がとれるかしら」

「リリィマリンを返しなさいっ……さもないと……」
「さもないと？　さてどうするの？　お友達もろともあたしを攻撃してみる？」
その言葉に、フレアは唇を噛んで沈黙する。
魔法少女として、ネビュラに屈することはできない。だからといって、マリンを見捨てるという選択はフレアにはできなかった。
「そうよねえ、あなたはそういう子よねえ。あたしの話を聞く気になった？」
「っ……どうしたらマリンを離してくれるの？」
「そうそう。最初からそういう態度でいればいいのよ」
「っ……！」
「あなたもネビリム様の使徒になりなさい……なんて言っても聞かないでしょう？」
「そんなの当たり前でしょ！　誰がそんなのになるもんですかっ！」
「だからそこまでのことは言わないわ。そうねぇ……この子の代わりに、あたしの調教を受ける、っていうのはどう？」
「調、教……？」
「そうよぉ。とぉってもキモチ良くなれるコト。どう？　あなたが受ける？　それとも勝手に捕まったマヌケな相棒のツケを払うなんて嫌かしら？」
「わかった……アンタの言うこと聞くから……」
「イイ子ねぇ……」
「そ、それと……怪人を暴れさせるのをやめさせなさい。それができないなら、マリンのためにもその取引はできない」

「……んふっ。別にそんな条件を聞いてあげる必要なんてないんだけど……いいわ。あなたの健気さに免じて、やめてあげる」
ネビュラは鞭で異形の怪人を打つと、怪人は空間の歪みに呑まれてどこかへと消えてゆく。
恐らくはネビリムの使徒のアジトへと転送されたのだろう。
「それじゃああたしたちもアジトに行きましょうか」
バチンッ！　と再度ネビュラの鞭が虚空を叩くと、空間が歪み、マリンを抱えたままのネビュラは歪みに入っていく。
「ちょっと！　マリンを解放するって言ったじゃない！」
「何言ってるの？　ここで解放なんてしたらあなたに逃げられちゃうかもしれないじゃない」
「アンタみたいなのと一緒にしないで。約束したなら守るわよ」
「どうかしらねぇ。あなたがあたしを信じられないのと同じくらいには、あたしもあなたを信用できないの。安心しなさい。ちゃあんと解放してあげるから」
それだけを言い残して、ネビュラは空間の歪みに消えていく。
いつもはネビュラが入った瞬間消えてしまうその歪みはまだ残っていて、フレアを手招きしているようだった。
「まりな……絶対に、助けてあげるから……！」
意を決したフレアが、空間の歪みへと足を踏み入れる。
途端に天地の感覚が消え去り、奇妙な浮遊感に全身が包まれた。
急激に意識が薄れてゆく。

◆シーン3

「んっ……」

フレアが目を開けると、見覚えのない天井が広がっていた。

石なのか金属なのか、あるいはもっと別のなにかなのか。何でできているのかもわからない真っ白な天井と、同じ材質でできた壁と床。

窓ひとつなく、息苦しさすら感じる部屋の中には、フレアが寝かされていたベッド以外に調度品らしいものもなにもない。清潔感こそあるものの、それはよく手入れされた清潔感というよりも、生き物の存在を感じられない無機質さだった。

「こ、こは……？　なんだか牢屋みたいな……」

意識の覚醒にあわせて、意識を失う前の記憶が蘇っていく。

「そうだ。私……ネビュラに捕まって――」

「ふふっ。どうやら目が覚めたみたいだねぇ。リリィフレア」

「その声……ネビュラ！」

声のした方向へとフレアが振り返ると、あったのはスピーカーだった。

「まりな……マリンは無事なんでしょうね」

フレアの問いかけに、回答はすぐにはなかった。

スピーカーの奥で何かを囁き合うような声が聞こえてから、ネビュラの声が返ってくる。

「えぇ。もちろん無事よ。今はまだ、ね」

「マリンに手を出したら許さないんだから！」

「ふふっ。それも全部、あなた次第よ。リリィフレア」
返されたその言葉に、フレアは眉をひそめる。
「どういう意味？」
「あなたが素直でいるうちは、マリンに手を出さないことを誓ってあげる。偉大なる淫堕神ネビリム様に誓って、ね」
「くっ……」
「これからあなたのところに行くけど、変な気を起こさないことね。私を傷つければ、マリンがどうなるか――」
「わかってるわよっ……！」
フレアが返すと、その直後、部屋の扉が開いてネビュラが入ってくる。
一瞬、開いた扉に飛び込むべきだとフレアの魔法少女としての経験が訴えてくる。
だがそれはできない。そうすれば、代わりに責め苦を受けるのはマリンになるのだから。
身代わりになる覚悟なら既に出来ているのだ。
そう逡巡する間に、開いた扉は再び閉まっていた。
（大丈夫……何をされたって、絶対に負けたりしない……）
不屈の意志を自分に言い聞かせるように頷いて、フレアは近づいてきたネビュラを見上げる。



「おはよう、フレアちゃん。邪魔をされていたときにはただのムカつく小娘だったけど、こうして改めて見てみるととっても美味しそうね……」
「なっ、なによ、気持ち悪いっ」
「可愛らしい顔立ちにもちもちのお肌、生意気そうなその瞳もとっても魅力的……おっぱいは物足りないけれど」
上から下へ、そして今度は下から上へ。
蛇の舌に舐められるようなネビュラの視線に、フレアの背筋を怖気が走った。
「う、うるさいっ！　余計なお世話よ！」
「あら。大事なコトよ？　これからあなたはあたしのオモチャになるんだもの」
「っ……私に、エッチなことするつもりなんでしょ」
相手は仮にも世界を淫欲によって堕落させようとする淫堕神の使徒を名乗る存在だ。
そんな相手に捕らえられて、自分がどんなことをされるのか想像できないほどフレアは馬鹿ではない。すべて理解している。だからこそ、フレアはマリンの身代わりになったのだ。親友であり、相棒であり、魔法少女としての後輩でもある彼女をそんな目に遭わせることは、フレアにはできない。
「エッチなこと、ね。ええ、そのとおりよ。エッチなこと、だなんて、中学生の女の子が口にする程度の言葉じゃ想像もできないくらい、とびっきりいやらしくってキモチのイイこと、たっぷり教えてあげるわ」
「くっ……」
「手始めに、そうねぇ。ネビュラ様、私リリィフレアをいやらしく調教してください、と

でもおねだりしてもらおうかしらぁ？」

嗜虐的な笑みを浮かべるネビュラに、フレアは奥歯を噛み締めて屈辱に耐える。

もちろんそんな言葉、普段ならば口が裂けても言いたくなどない台詞だ。しかしマリンを人質に取られている今、フレアに選択肢はなかった。

手の平に爪が食い込むほど両の拳を握り締めながら、フレアは口を開く。

「ネビュラ、様……わ、わたし……リリィフレアを……いやらしく、調教して、ください……これで満足？」

「感情が籠もってないのは残念だけど、今はそれで許してあげる。調教が終わる頃には、あなたもエッチなことがだぁい好きな、エッチな女の子になっているわ」

「誰がそんなことっ……！」

「ふふっ。強がっちゃって。でも、そんなトコロも可愛いわよ」

ネビュラはフレアの耳元に口を寄せ、囁きかける。

ネビュラの吐息がかかり、ゾクッとした悪寒がフレアの背筋を走る。

ネビュラは舌なめずりをすると、そのまま唇で首筋をなぞるようにキスをした。

「ひゃっ！？」

思わず声を上げるフレア。

ネビュラはそんな反応を楽しむかのように、今度はフレアの胸を揉みしだいた。

服越しとはいえ、他人に触られたことのない場所への刺激に、嫌悪感と恥ずかしさがこみ上げてくる。

フレアは唇を強く噛み締めて、なんとかその不快感に耐えていた。

「じゃあ早速はじめるとしましょうか」
「はじめる……ってなにをするつもりよ？」
「そんなの、あなた自身の口で言ったばかりじゃない。あなたの身体を、いやらしく調教してあげるのよ。淫堕神ネビリム様の使徒に相応しい、快楽狂いにね。抵抗したいならしてもイイけど、その場合は――」
「マリンにするって言うんでしょ？　わかってるわよ。抵抗なんてしない……好きにしなさい。だからっ……」
「えぇ。わかってるわ。あなたが素直に調教を受けているうちは、マリンには手を出さないであげる。美しい友情ねぇ」
　白々しく笑うネビュラに、フレアはギリギリと奥歯を噛み締める。
「そうだ。イイコト思いついたわぁ」
「っ……どうせ、ロクなことじゃないんでしょう？」
「あら？　あたしの愛撫じゃあお気に召さなかったみたいだから、自分で触らせてあげようと思っただけよ。オナニー、してみせなさい？」
「オナっ……！」
「なぁに？　その歳でオナニーを知らないわけじゃあないでしょう？　呼び方は何でもいいわよ。なにが良いかしら。自慰？　マスターベーション？　自涜（じとく）？　マスかき？　それともマンズリ？」
　ネビュラはわざとらしく指折り数えながら、下卑た笑みを浮かべてみせる。
　フレアは顔を真っ赤にして俯いた。

経験がないと言えば嘘になる。だが、それを人前で晒け出すというのは、年頃の少女にとって耐え難い羞恥だった。

「いいのかしら？　あなたが嫌だと言うなら、マリンに代わりにしてもらうことになるけど？　別に私はどっちでもいいのよ？　あぁ、いかにも清楚な風のマリンのマンズリも見たいわねぇ」

「――ッ！　わかってるから、マリンには手を出さないで！」

「あら、そう？　あたしだってこんな古典的な脅迫、何度もしたくないのよ？　誰かさんが素直ならね」

意地悪いネビュラの言葉に、フレアはこれ以上の反論を諦めた。

反論したところで事態は好転しない。それどころかネビュラを楽しませることになるし、最悪、マリンの身に危害が及ぶ可能性も増す。

自分が辱めを受けさえすれば、マリンのことは守ることができる。自分にそう言い聞かせながら、フレアは意を決して羞恥に震える指先をスカートの中へと潜り込ませた。

「あら、ダメよ。服の下でちょこちょこっとイジるだけだなんて、ちっとも面白くないもの。スカートをたくしあげて、見えるようにしなさい？」

「く、うぅっ……わかった、わよっ……！」

言われたとおりに、フレアはスカートの裾を掴むと、そのままゆっくりとたくしあげる。

羞恥ゆえのその遅さは、しかしネビュラにはストリップダンサーのような焦らしのように映っているのか、ことさら急かすこともせずに、ニヤニヤと淫猥な眼光を送り続けてくる。

露わになったのは飾り気のない白のショーツ。
だがその中心は、うっすらと白よりも濃い色の染みを浮かべていた。
（なんで……わたし、もう、濡れてっ……）
「あらあら。もう濡れてるわね。正義の魔法少女リリィフレアは公開オナニーで興奮する変態さんなのかしら？」
「ちがっ……私はそんなんじゃっ……！」
否定しようとするものの、湿り気を帯びたショーツは現実だ。
フレアは気付いていないが、部屋の中には無色無臭の媚薬ガスが極めて高濃度で充満している。
魔法少女だからこそ、何故か身体が火照っているという程度で済んでいるフレアだが、一般人であればひと呼吸しただけで、恥も外聞もなく色狂いになるほどの強力なもの。
魔法少女としての才能の経験が豊富なフレアは、それほど濃密な媚薬であっても、無意識のうちに軽減してしまっている。その事実が不幸にも、自分の身体に起きている異変を、異変と捉えられなくしていた。
ネビュラの告げた言葉の通り、自分が見られて興奮する変態なのではないかという疑惑がフレアの中を駆け巡る。
「ほら、見てほしいんでしょう？　だったらちゃあんと、見てくださいっておねだりしてからはじめなさい？」
「くっ……リリィフレアのオナニー……ご覧になって、ください……」
顔面が、炎の魔法を使ったかのように熱を持つ。

フレアも年頃の女の子だ。性に対して関心はあったし、自慰の経験だってある。
だからといってそれを誰かに見せたことなどもちろんありはしない。
それを、こともあろうに敵であるネビュラに見られるのだと思うと、羞恥の心は余計に燃え上がる一方だった。
「あなたの身体は見られたくって待ちきれないみたいだし、さっさとはじめなさい」
指先をショーツへと宛がうと、それだけでくちゅり、と淫らな蜜音が生まれた。
その音をネビュラは聞き逃さずに、唇を半月に歪めてみせる。
今までに味わったことのない屈辱感に、涙が溢れそうになる。
それでも、マリンを救うためには、この屈辱に耐える以外になかった。
フレアはぎこちない手付きで、自らの割れ目をなぞりはじめる。
その瞬間、
「んっ……んんっ……♥」
普段自分で慰めるときとは比べものにならない快感が背筋を駆け上がり、出したくもない喘ぎ声が溢れ出た。
「あら……♥　えっちな声ねぇ。ちょっと触っただけでいやらしい声が出ちゃうなんて、リリィフレアは淫乱さんねぇ。それともやっぱり、見られて感じちゃうコ？」
ふるふると首を横に振りながら、フレアは自慰を再開する。
「んっ……く、ぅんっ……♥」
必死に声を抑えようと努力するが、どうしても漏れ出てしまう喘ぎ声がフレア自身の心を責め立てる。

「ぎこちないわねぇ。変態さんの割りにオナニーの経験は少なめなのかしら？」
「うるさ、んんっ❤」
反論しようとした瞬間、期せずして敏感な箇所に触れた衝撃で甘い声が漏れる。
（ネビュラなんかに見られて感じちゃう、なんてっ……それじゃ本当に、変態みたいじゃないっ……）
ネビュラの言葉で生まれた疑念は、自らの指でなぞってゆくたびに明確になっていくようで、それが恥ずかしい以上に恐ろしかった。
「ふふっ❤　キモチイイところが見つかったのかしら？　でも、まだまだ下手っぴねぇ。そんなんじゃいつまで経ってもイケないんじゃないかしら」
ネビュラは嘲笑しながら、華奢な指先でフレアの乳首を摘まむ。
「ひゃうんんっ❤」
決して強い力を加えられたわけではない。指の腹と腹とで転がすような、むしろ優しくすらある動き。それなのに、伝わってきた官能は割れ目をなぞっているのとは比べものにならないほどの強さだった。
フレアは慌てて口を塞ぐが、時既に遅し。
「なぁに今の声？　ふふっ。リリィフレアってばとっても敏感なのね❤」
「そ、そんなことっ……！」
鬼の首を取ったように邪悪な笑みを浮かべたネビュラに、フレアは何かを言い返そうとして、諦めた。
（なに、今のっ……自分でシたときと、全然、違うっ……）

「ふふっ。今あなたが何を考えてるのか、当てましょうか？」
ネビュラの言葉に、フレアはふるふると首を横に振る。
「だ・ぁ・め❤　イヤでも当てちゃうわ。オナニーするより何倍も気持ちいいと思ってるんでしょ？」
（なんでっ……）
「今度はなんで、って思ったわね？　だってあなたの顔、とぉっても気持ちよさそうなんだもの」
「ちがっ……違うもん……！」
表情を指摘されて、フレアは頭を振って表情を戻す。だが鏡もない中、それがどれほどの意味を成しているのかはフレア自身にもわからなかった。
「あらそう？　じゃあそういうコトにしておいてあげる」
自分の否定が虚勢に過ぎないことも、それが見抜かれていることも、フレアにはわかっていた。だからといって快楽を認めるわけにはいかない。
「ほら、手を止めていないではやく続きをしなさい？　マリンが――」
「わかってるわよっ！」
フレアはヤケクソ気味に答えながら、懸命に手を動かしはじめた。
指先が割れ目をなぞり上げると、普段の何倍もの快感が背筋を駆けて、目の前がうっすらと白む。
ネビュラに見られていることを意識しないようにしようとすればするほどに、全身を舐めるようなネビュラの視線を強く感じてしまう。

「んっ、く、はぁっ……んぅっ……♥」

声を漏らさぬよう唇を噛み締めるが、それでも抑えきれない吐息と喘ぎ声が、静かな部屋に響く。ネビュラはその様子をじっと見つめながら、満足げに微笑んでいた。

蛇のような視線はフレアの羞恥心をさらに煽り立て、フレアはさらに昂ぶっていく。

「はぁ……んっ……うぁっ……んっ……♥」

命じられるまでもなく、フレアの手の動きが徐々に早くなっていく。

その動きに合わせて、フレアの口からは荒々しい呼吸音が聞こえだす。

（なに……これ……♥）

今まで経験したことのないような感覚が、脳髄の奥底から湧き上がってくるようだった。何かが込み上げて来るような、そんな予感。それがなんであるのか、フレアはまだ知らなかった。ネビュラの前で、それを見せてはいけないという理性と、それを早く味わいたいという本能とがせめぎ合う。

（でも、でもぉっ、シなきゃ、まりながっ……♥）

それが本当に親友のことを想っての思考だったのか、あるいは自分への言い訳だったのか、フレア自身にもわからなかった。間違いないことは、フレアが湧き上がるそれに身を任せると決めたこと。

ぐちゅぐちゅっ、と割れ目から淫猥な音が響き出す。

「んっ……んんんっ……！」

フレアは無意識のうちに、腰を振り始めていた。その様子は、まるで男根を求める娼婦のようでもあった。

「あぁ……あぁぁっ……！」
「ふふっ。イキそうなんでしょう？　イッちゃいなさい？」
ネビュラの言葉はもう関係なかった。
異常なほどに昂ぶった身体の奥から溢れ出す淫らな欲求に抗えずに、フレアは一心不乱に指を動かす。まるで手が乗っ取られてしまったかのように、指先は巧みに動いて、フレア自身でも気付いていなかった性感帯を的確に刺激する。普段ならば恐ろしくて躊躇うところにも容赦なく責め立てる。
そしてついに、そのときが訪れた。
「あっ……あぁぁっ……！」
フレアは背中を大きく仰け反らせ、びくんっと痙攣した。股間からは小便とは違う透明な液体が、クジラの潮噴きのような勢いでぷしゅうと噴き出す。
頭の中がスパークし、視界の奥が明滅を繰り返す。
フレアが生まれてはじめて味わう性の快感の頂点――絶頂だった。
まるで、意識だけがどこか高いところへと吹き飛んでしまうような、浮遊感を伴う奇妙な感覚。怖いほど、しかしただ一度経験しただけで病みつきになりそうな快感。
直後、全身のあらゆる場所から力が抜けて、フレアはぐったりとベッドに身体を埋めた。肩を上下させながら、浅い呼吸を繰り返す。
「随分と派手にイッたみたいねぇ」
「イッ……た……？」
「あら……あんなヘンタイさんなのに、イッたのははじめてなの？　ふふっ♥　初めての

アクメで潮まで噴いちゃうなんて、素質あるわよ♥」
「そん、な……素質なんて、いらないっ……！」
余韻に浸っていたくなるほどの快感を、しかしフレアは意思の力で跳ね飛ばす。それでも声音が弱々しく震えてしまっていることは、他ならぬフレア自身が一番よくわかっていた。
キュン、キュンと。極大の快感を得たばかりの下腹部が、奥から疼きを訴えてくる。
もっと、もっと、もっとと。
今まで知らなかった、性の快感を、さらに強い刺激をとねだってくるのがわかる。
（どうして……）
今までは、こんなことなかったはずなのに。
フレアは自分の身体の変化が信じられずにいた。
「はぁん……もう、ダメよフレア……あなたのマンズリ姿、可愛すぎて、エッチすぎて、あたし、もう我慢できないわぁ」
「ネ、ネビュラ……？」
フレアは目を疑った。
ネビュラの股間には、女性にあるはずのないモノが、堂々と屹立していたからだ。
「なっ……それはっ……なんで、アンタ、男だったのっ！？」
「ふふっ。これ？　これはネビリム様に授かったお力で生やしているの。あなたのパパなんかよりもよっぽど立派でしょう？」
「しっ、知らないわよっ、そんなのっ！」

否定しつつも、ネビュラの言葉のせいで小さい頃に一緒にお風呂に入ったときの父親を思い出してしまう。しかし、記憶の中の父親のモノは、目の前に差し出されたネビュラのそれとはまるで違った。

「ほぉら、よくご覧なさい？　これが、今からあなたをオトナのオンナにしてくれるオチンポ様よ」

ネビュラの言葉に操られるように、フレアの視線はその股間に屹立するモノへと吸い寄せられた。

太く、長く、それでいて毒蛇の如く鎌首をもたげる様はそれ自体が独立した異形の生物であるような錯覚すら抱く。

ネビュラ自身の、モデルのようにスラリと均整の取れた女体の股間から、脈打つ血管を浮かばせる剛直が屹立している様は、悪い夢のような光景だった。

とろぉり、と。

鈴口から滲んだ透明な液体が、銀の糸を引いてフレアへと滴ってゆく。

「んふふっ。このコもはやくフレアの淫乱おまんこに挿入(はい)りたいって言ってるわぁ」

「ひぅっ……」

これまで、魔法少女として自分の何倍、何十倍も巨大な敵や、鳥肌が立つほどの不気味な化物とも対峙してきた。

だが、これほどの恐怖を味わったことはない。

ほんの数十センチの肉の槍が、これまで対峙したどんな敵よりも恐ろしかった。

自慰によって火照った顔が、火照りを維持したまま青ざめる。毅然とした態度をとらね

ばならないと思っていても、奥歯がガチガチと音を立てるのを止められない。
「あら……怖いの？」
「うっ、うるさいっ！」
「安心なさい。痛くなんてしないわよ。エッチなことがどれだけ気持ちイイことなのか、教えてあげる……♥　すぐにエッチが大好きな淫乱になるの。そうしたら……そうねぇ。お姉様とでも呼んでもらおうかしら」
「そんなの、私は絶対にならないっ！」
「オナニーであ～んなに乱れておいて、全然説得力がないわよ？」
「そ、それは……」
ネビュラのふたなりペニスの先端が、割れ目に触れる。
「ひぅんっ♥」
人生初の絶頂を味わったばかりで、その余韻も冷めやらぬ敏感な割れ目に伝わってくるのは、フレアの必殺魔法のような灼熱の熱さだった。
いくら性の経験に乏しいフレアであっても、セックスがどういった行為なのかは知っている。こんなものを自分の中に挿入されたら、快感などの話ではなく、自分の身体がバラバラに壊れてしまうのではないかという恐怖すらあった。
だというのに、今にも散らされようとしている花唇は、初めて触れた巨根を前に、卑猥な蜜をじゅくじゅくと溢れさせて止まらない。
「ふふっ♥　とっても可愛いわよ。フレア……だけど、屈したりしないって言うんなら覚悟しなさい？　あたしも、たまには調教を楽しみたいもの」

興奮した様子で早口にまくしたてると、ネビュラは大きく腰を突き出した。フレアの膣内へ、凶悪極まりないネビュラの巨根が一気に侵入する。

繊維が引き千切られるような深いな音とともに、フレアの視界が白く染まった。

「っ――――――

た。

（なにこれぇ……！　すご、すぎるっ♥　セックスって、こんな、キモチ、いいのぉっ？）

絶頂を繰り返しながら、フレアは、自分が自分でなくなってしまうような感覚を覚えていた。

それは、フレアの十余年の人生で完全なる未知の体験だった。

初めてのセックスだというのに、まるで慣れ親しんだ相手のように、フレアの膣内はネビュラのペニスに絡みつき、子宮口が亀頭に吸い付いて精液を搾り取ろうとする。ネビュラの腰の動きに合わせて、フレアの腰が動き始める。

「んふっ。身体の方は早速素直になってきたみたいよ？」

「う、うるひゃいぃ……！」

快楽に染まった声で反論するも、フレアの表情はすっかり蕩けきっていた。

その様子は、とてもではないが先ほどまでの凛々しい姿からは想像できない。

「んふふっ。まだ強情を張るつもり？　まあいいわ。時間はたっぷりあるんだもの」

ネビュラはそう言って、フレアの身体を抱きしめた。

そのまま唇を重ねると、フレアの舌を絡め取り、唾液を流し込む。

「んぐっ……ちゅぱっ……はむっ……ぢゅるるっ……れろっ……はぁっ……んっ……♥」

今のフレアに、それに抗う理性はなかった。流し込まれる唾液を呑み込み、絡んでくる舌を追い返すでもなくされるがままに愛撫を受け入れる。

もちろん快感は口の中だけではない。唇を重ね、舌で繋がったまま、ネビュラは激しく腰を打ち付けてくる。

フレアは為す術なく膣内で暴れ回る肉棒を感じながら、膣壁を擦られる度に絶頂を迎えていた。絶頂を迎えることで膣が締まり、ネビュラの肉棒の形をはっきりと感じ取ってしまう。

「んはぁっ……あっ……はぁんっ……んんっ……♥」

激しい抽挿（ピストン）が続く中で不意にネビュラが口を離すと、互いの口から銀色の橋がかかる。

その光景が妙に艶かしく見えてしまい、フレアは顔を赤らめる。

「んぃっ♥　や、えっ♥　やめっ♥　うごか、にゃいれぇっ♥」

「無理よぉっ！　こんなに具合のいいオマンコ、動かずにいられるわけないでしょ！　文句ならあたしのチンポに吸いついてくる自分の淫乱マンコに言いなさいっ！」

どれほど口で否定しても、膣肉がネビュラの剛直にキュウキュウと吸いついていることを誰よりも理解しているのはフレア自身だった。

カリ高の肉棒が狭い膣内で往復するたび、自分自身の膣圧によって押しつけられた肉槍の感触を感じてしまう。

「あぁもう、最っ高……♥　あのクソ生意気なセイントリリィも、こうしてチンポをぶち込んであげたら可愛い仔猫ちゃんなのねぇ♥」

ネビュラはスパートをかけるように勢いよくピストンを加速させる。

「ひゃあんっ！？　らめっ、激しすぎっ……あぁっ♥」

「んふふっ。もうすぐよ。もうすぐ、あたしのザーメンたぁっぷり注いであげるわぁ♥　ネビリム様にいただいた、ネビル因子がたっぷり詰まったネビルザーメン♥　あなたもネビリム様の忠実な僕になれるわよぉっ！」

「だ、誰がなるもんですかっ！」
「快楽を、欲望を受け入れなさい♥　そうすれば、もっと気持ちよくなれるわ♥」
加速したピストンが、先ほどまでよりもさらに深く、強く、フレアの膣奥を叩きつける。
それまで届かなかった深いところまで入り込んでくる圧迫感と快感に、嬌声が漏れるのを止めることができない。
「そ、そんなこと……！」
「そう？　でも、ここは正直よ？」
ぐちゅっ！　ぐちゅぅっ！　と。挿入したばかりのときとは明らかに違う、重く、粘ついた蜜の音。
膣内から伝わる刺激と外から聞こえる水音が、自分の秘所がどうなっているかを否応なしに自覚させられる。
「やっ、やめてっ……」
必死に懇願するフレアを嘲笑うかのように、ネビュラは腰の動きをさらに早めていく。
「あっ、あぅっ……」
「んふっ……」
快楽の波がどんどん押し寄せてきて、絶頂が近づいているのがわかる。
「んっ……出るわよぉっ……！」
「い、いやぁっ……！」
「イクときはちゃあんとイクって言うのよ？」
ネビュラの言葉は、絶頂直前の蕩けた頭の無意識の場所に、染み込むように響き渡った。

フレアの拒絶も虚しく、ネビュラは力強く腰を打ちつけ、亀頭が子宮の入口にキスをする。

「ほらっ、ほらぁっ！　射精るわっ射精るわよぉっ、フレアぁっ♥　あたしのおちんぽミルク、フレアのおまんこにびゅるびゅるってぇっ♥」

どぴゅっ！　ぶびゅるるるるっ！

熱い奔流が膣内を満たし、子宮が満たされてゆく。

同時に凄まじい絶頂に襲われ、意識が飛びそうになる。

「イクッ、イクイクイクイクゥゥゥゥゥゥゥッ！」

呪詛のように染み込んだネビュラの言葉が、フレアに無意識の絶頂宣言を口にさせた。

あまりの衝撃に、フレアの膣は強く収縮し、肉棒を締め付ける。その締め付けによって、ネビュラの射精はさらに勢いを増した。ネビル因子を帯びた大量の白濁液が子宮に流し込まれる。

ドクンッドクンッと脈打つ肉棒の鼓動が膣を通して伝わってくる。それがたまらなくキモチイイ。そしてそれがどれほどおぞましいことなのか理解し、拒絶するだけの理性は、今のフレアにはなかった。



十秒、三十秒、一分――あるいはそれ以上も続いただろうか。
絶頂の余韻に身体を震わせながら、ネビュラはゆっくりとフレアから肉棒を引き抜いてゆく。ゴポッと音をたてて愛液と精液とが入り混じった液体が流れ落ちた。
「ふふっ❤　フレアがあんまりにもエッチで可愛いから、いっぱい出ちゃったわぁ」
「うっ……あぁ……❤」
ネビュラは満足げに微笑むと、フレアの頬に手を添える。
「ふふっ❤　フレアだって、あたしのチンポ気持ちよかったでしょう？」
そう言って、ネビュラは再び唇を重ねた。
今度は、先ほどよりも長く、深く。
舌を絡ませながら、ネビュラはフレアの身体に手を伸ばす。
流し込まれる唾液にもネビル因子が含まれているのか、ドロリと粘ついた唾液が流れ込んでくるたび、頭の奥の深い場所から、堕落に誘う声が聞こえる。
受け入れさえすれば、もっと気持ちよくなれる。
ほら、呼びなさい。あなたが処女を捧げた、お姉様のことを。
――ネビュラお姉様。
音は出さず、口の中で、その名を呟いた。
その瞬間、
「んっ❤　んぅっ❤　あぁぁんぅっ❤」
「ほら、呼んでみなさい。ネビュラお姉様とね」
耳元で囁かれた言葉に、フレアは子宮が疼くのを感じた。

戦いの場で交わしたどんな言葉とも違う、ネビュラの言葉は優しく、甘かった。
耳の穴に、温かな蜜を流し込まれたように、鼓膜が甘美さに包まれる。
口に出せば、もっと気持ちいい。
ドクン、ドクンと子宮が高鳴る。
「ほら、呼んでみなさい？　ネビュラお姉様、とね」
「ネ、ビュラ……」
「えぇそう。良い子ねぇ。言いなさい。言えばとっても気持ちよくなれるわよ？」
口に出して、彼女の名を呼んだときに訪れるであろう巨大な快感に、身体が期待していた。
だけど――もしその言葉を口にしたら、もう戻れない気がした。
脳裏に浮かんできたのは、大切な親友の姿。
その直後、今すぐにも気持ちよくなりたいという浅ましい欲求を、正義の炎が焼き尽くし――
「ネ、ビュラ……おばさんっ！」
決して屈しはしないのだと、宣言するように、フレアはネビュラを睨みあげる。
「お、おば、ばばっ！　こっ……この私を、おばさんですってぇ！？」
「アンタなんて、私から見たらおばさんよ！」
「また言ったわね！　このクソガキィッ！」
（ダメ……もう、意識が……保て、ない……）
思わず鞭を振りかぶるネビュラだが、罵倒の言葉を吐き出したフレアは、意志力を使い

果たしたのか意識を失っていた。
「従順にしていたら優しく堕としてあげようと思ってたのに。許さないわ。どこに出ても恥ずかしい、どうしようもない色狂いにしてやるわ……！」

＊

「んっ……」
フレアが目を覚ますと、両腕と両脚が何かで固定されていた。
動こうとしても、軽い身じろぎができるだけで、抜け出すことはできそうになかった。
「あら、目が覚めた？」
「ネ、ビュラ……」
目を開けるとネビュラの淫猥な笑みが視界に入り、ビクリッ、とフレアの身体が大きく震える。
そんなフレアの反応が新鮮なのか、ネビュラは嗜虐的な笑みを浮かべ、フレアの顎を持ち上げる。
「ふふっ。どうしたの？　そんなに怯えちゃって」
フレアの反応は当然のものだった。
なにせ彼女にレイプされ、処女を奪われたばかりなのだ。マリンを守るため気丈にそれを受け入れたフレアだったが、それが終わった今になって、年相応の少女としての恐怖が襲ってくる。

もちろん、何度同じ選択を迫られても、マリンを守るためならば同じ選択をするだろう。
それでも、身体に刻まれた嫌悪と恐怖は消えてはくれない。
フレアの反応を楽しむように、ネビュラはふとももに指を這わせる。
「っ――――――！」
その感触にフレアは声にならない悲鳴をあげる。
フレアが何より恐ろしいのは、痛みでも、穢されるおぞましさでもない。強引に犯されているというのに、それを不快ではなく快楽として受け取ってしまうことだった。ふとももに伝わってくるネビュラの指は官能的で、甘い疼きがふとももから子宮へと流れてきてしまうのが怖かった。
「ひゃっ……やめてっ……」
「んふふっ♪　あの生意気なフレアも、こうなれば可愛いわねぇ❤」
ネビュラはフレアの反応を楽しむかのように、その身体を執拗に撫で回しはじめる。
「やっ……んっ……」
「どうしたの？　そんなえっちな声を出しちゃって」
ネビュラは決して性器や、乳首といった直接的な性感帯を刺激しなかった。触れるのはあくまでその周辺。ふとももや、乳房、首筋に、尻。だが直接触れられないからこそ、どこか物足りない刺激は、疼きとなってフレアの身体の中で暴れ回る。
「ふふっ。可愛い反応するじゃない。もっといじめたくなっちゃうわぁ❤　だけど、まずはこっちから変えていかないとねぇ」
言葉とともにネビュラが指を鳴らすと、怪しげな機材が下りてくる。

いかにもマッドな科学を感じるそれらの機材の中から、いくつかの機材がひとりでに伸びる。

触手にも似た不気味なチューブの群れだ。根元にはどう控えめに見ても身体によくはなさそうな極彩色の薬液がたっぷりと詰まったタンク。先端にはキラリと無機質に輝く鋭利な針。子供を怖がらせるために悪意を持ってデフォルメされた注射器のようなデザイン。

「あたしのチンポだけで素直になるならこんなモノ使わなかったんだけど……んふっ♥　あなたが強情だからいけないのよ？」

それらがこれから自分の身体を貫くのだと理解し、フレアは頬を強張らせた。

「いいわぁその表情♥　ゾクゾクしちゃう♥」

ネビュラの手の動きに従って、注射器の群れフレアの身体に狙いを定める。

「あら。正義の魔法少女サマはその歳でお注射が怖いのかしら？」

「そっ、そんなんじゃないわよ！　なにをするつもりなのっ……」

「なにって、決まってるじゃない。コレはね、あなたの身体をどうしようもないドスケベに改造するための装置よ」

「改、造……！？」

「大丈夫よぉ。痛くはないわ。ただちょっと気持ち良すぎて、頭がおかしくなるかもしれないけど」

ネビュラが手をかざすと、注射器の群れはフレアの首筋やふとももといった、重要な血管の通った箇所へと刺さっていく。

痛みはない。トクン、トクンと音を立てて、針に繋がった極彩色の薬液がフレアの内側

へと流れ込んでくる。
「なに、これっ、はいって、くるっ……」
身体の内側に得体の知れない何かが入ってくるような感覚に、フレアは声を漏らす。
「気持ちいいでしょう？」
熱い。熱い。熱い。
胸が熱くてたまらない。燃えるような熱と同時に感じるのは、疼き。
身体の奥底から、今まで感じたこともないほどの熱が湧き上がってくる。
それは次第に強くなり、まるで内側から身体を焼かれるような錯覚に陥る。
今すぐに、痛いくらいに掻き毟りたいという欲求も、四肢を拘束された今叶えることはできない。
「ぐぅっ、んっ、うぅうっ！」
その中心は、乳頭だった。
「なに、これっ……熱い……んっ❤」
身体が燃えるように熱い。
心臓の鼓動が早くなり、呼吸が荒くなる。
汗が噴き出て止まらない。
子宮の奥がきゅんっと疼いてたまらない。
股間からは愛液が滴っていた。
「んっ……あぁっ……んぅっ……くぅっ……」
フレアは必死に歯を食い縛るが、どうしても声が出てしまう。

ネビュラはそんなフレアの様子を見てニヤつくと、フレアの頬を撫でる。
「今あなたに注ぎ込んでいるのは、ネビリム様のお力……ネビル因子よ。さっきチンポで注いであげたものと同じ、ね」
「ネビル、因子、ぃっ」
「ネビリム様のお力が、生意気なあなたを欲望に素直な色情狂に改造してくださってるのがわかるでしょう？」
ネビュラの問いに、フレアは答えられない。
身体の芯が燃え上がるようで、思考がまとまらなかった。
「おっぱいっ……おっぱい、あつっ……ひゃうっ♥」
（なんなのっ、私の身体、おかしいっ……）
フレアは無意識のうちに腰を振ってしまう。
その動きに合わせて、年相応のささやかな膨らみも揺れ動く。
「ふふっ。もう我慢できないみたいね」
「ち、違うっ……これはっ……んっ♥」
否定しようとしても、声が甘くなってしまい説得力がない。
「認めなさい。自分がどうしようもなくスケベな女だって」
ネビュラの言葉に、フレアは首を横に振る。
「強がっちゃって。でも、そんなところも可愛いわぁ」
ネビュラはフレアの耳元に口を寄せて囁く。
「本当は、気持ちよくして欲しいんでしょう？」

ネビュラの甘い言葉が脳髄まで響くようだった。
「んっ……そんなことっ……」
「素直になれないフレアにはお仕置きよ。それとも、ご褒美になっちゃうかしら？」
新たに現れた針がフレアのある場所に狙いを定める。
それがどこを狙っているのかはフレアにもすぐにわかった。
ピンと勃った乳首の先端に極細の注射針が触れる。
「っ……」
針がフレアの乳首へと埋まっていく。
虫に刺されたような、チクリとした感覚。痛みはほとんどなく、むしろ官能の甘い疼きすらあった。
「なにっ……これっ……んひゃぁぁっ♥」
「どう？　気持ちいいでしょう？」
「んひゃぁっ♥　だめっ……ちくびっ……ひゃうっ♥　おかひくなっひゃうっ……んひゃぁぁっ♥」
「あらあら？　まだ始まったばかりなのに、そんなに気持ちいいの？　なら、もっと気持ち良くしてあげるわね♥」
もっと、という言葉への恐怖と、本能的な期待が、ネビュラの手を視線で追わせる。
ネビュラの指はフレアの乳首に刺さった針からチューブをなぞり、その先にある円筒に達した。
蛍光色の樹脂で出来たそれがなんなのか、性知識の乏しいフレアにはまったくわからな

かった。

「なん、なの……それぇ……」

未知への恐怖が、フレアに思わず問いかけをさせた。

ネビュラはその問いかけに、この上なく楽しそうに頬を歪める。

「コレはね……オ・ナ・ホっていうの。オナニーホール……相手のいない寂しい男が、女の子の代わりにコレを犯すのよ」

言いながら、ネビュラはオナホを手に取り、その入口を指で開いて見せる。

その穴は、まるで生き物のように脈動していた。

「こうやって、ねぇ」

ネビュラは自身の剛直を、押し拡げた仮想の肉穴へと挿入する。

フレアの艶姿を眺めて溢れた先走りが潤滑剤となって、オナホはネビュラの肉棒を受け入れてゆく。その感触に、ネビュラの表情がだらしない笑みに変わる。

巨根を奥まで受け止めたオナホを、ネビュラは上下に動かしはじめる。

ずぷっ！　ずぷぷっ！

卑猥な音を立てながら、ネビュラの一人遊びが始まる。

「あぁっ、いいわっ！　最高よぉっ！」

目を逸らしたくなるような淫猥な光景。そのはずなのに、フレアは蕩けた嬌声を溢れさせるネビュラから視線を逸らすことができなかった。

ネビュラは両手を使って、激しくピストン運動を繰り返す。

じゅぽっ、じゅぽっ、と。

激しく、そしてなにより淫靡な音が鼓膜を揺らし、フレアの脳裏にはネビュラに犯された時の快感と屈辱が蘇る。

「んっ……くぅっ……んんっ」

ネビュラのモノがオナホを出入りする度に、フレアの膣内からは愛液が流れ出す。

フレアの秘裂は物欲しげにヒクつき、子宮はきゅんとうずくような感覚を覚える。

「あぁんっ♥　可愛いわよ、フレアぁっ♥　そんな顔されたら、あたしぃっ♥」

ネビュラは興奮を抑えきれない様子で、さらに激しいストロークを始める。

ぐちゅっ♥　ぬちゃっ♥　という音を立てながら抜き差しされるネビュラのペニスから目が離せない。

「んっ……んぅっ……んんっ♥」

フレアは無意識のうちに腰を振りはじめていた。

その動きに合わせて乳房が揺れ動く。

乳首は痛いくらいに勃起していて、その先端から白い液体が滲んでいた。

（なんなのっ……これぇっ……）

自分の身体に起きつつある変容に困惑しながらも、フレアは腰を振ることをやめられない。

（身体が熱くて……おかしくなっちゃいそうっ……）

「んぅっ……くぅっ……ふぅうっ」

「あぁんっ♥　射精（で）るっ♥　フレアのおっぱいにザーメン射精（で）るぅっ♥」

一瞬、フレアはその意味がわからなかった。

だがすぐに、オナホールから繋がった管の存在を思い出し、火照りきった顔を青ざめさせた。

「い、嫌っ、嘘っ、嘘でしょっ！？」

「んっ……くぅっ……ふぅうっ♥　もう我慢できないわぁっ♥」

「ちょっ、待ってっ！　お願いだからっ！」

フレアの懇願を無視して、ネビュラの肉棒が限界を迎えた。どぴゅーっ、と勢いよく飛び出した白濁液が、オナホールの中に注ぎ込まれる。

白濁した欲望はオナホの先端に取り付けられたチューブを駆け上がってくる。チューブの先は、フレアの乳首に刺さった注射針。

「んひゃぁあっ♥」

チューブを逆流してきたネビュラのザーメンが、乳首に突き立った針からフレアへと注ぎ込まれてゆく。

「あぁあっ……熱いのがっ……入ってくるっ……んひゃぁっ♥」

ネビュラの精子が乳首の先から入り込み、フレアの体内で暴れ回る。

「あぁんっ♥　ネビリム様のお力がたっぷり籠もったネビルザーメンがぁっ♥　フレアのおっぱいに注入(はい)っていってるわぁっ♥」

恍惚とした表情で、ネビュラは肉槍をシゴく手を加速させる。

「わかるかしら？　ネビリム様に特別な加護をいただいた、とびっきり濃厚なネビル因子……あなたの子宮に注いであげたのとは比べものにもならないでしょう？」

「ひゃうぅぅうっ♥」

「あぁんっ♥　いいわぁっ♥　その表情っ♥　最高よぉっ♥」

絶頂を迎え、ガクンガクンと痙攣する少女の痴態に興奮したのか、さらに硬度を増したネビュラの剛直は、なおも衰えることなくピストン運動を続ける。

ぐちゅっ♥　ぐちゃっ♥　と、卑猥な水音を響かせながら、ネビュラの剛直が出入りする。その度に、乳首を責められているような快感が走る。

「んくぅっ♥　うそ……こんなっ……おっぱいっ、感じちゃって……んひぃっ♥　だめっ……気持ちいいのっ……んくぅっ♥」

ネビュラはピストン運動を続けながら、フレアの耳元に唇を寄せ、囁く。

「無駄な抵抗はやめて、ネビリム様の寵愛を受け入れなさい」

「嫌っ、そんなのっ！」

「そうすればもっと――もっと――もぉっと、気持ちよくなれるのよ？」

（今より、もっと……気持ち、よく……？）

どくんっ、と。

心臓が――否、それよりももっとずっと下。腹の奥の子宮が、期待するように高鳴った。

フレアは決して、ネビュラに屈したわけではないし、ましてやネビリムの軍門に下ろうなど考えもしなかった。それでも一瞬、ほんの一瞬、ネビュラの告げたさらなる快感を想像した。期待してしまった。そのわずかな心の隙間を抜けて、ネビル因子はフレアの肉体に侵蝕してゆく。

「く、ぁ、んんっっ♥」

その熱が一気に全身へと広がって、フレアは背筋を大きく仰け反らせた。

「ほら、はじまった」
「んひゃぁぁっ♥　なに、これっ……あひっ♥　あへぇっ♥」
「あなたは今、あたしのネビル因子で身体を作り替えられて、気持ち良くなってるところなのよぉ。おっぱいで感じるなんて、やっぱり素質があるわねぇ……」
「そんなっ……うそっ……だめぇぇっ♥　あはぁぁっ♥　気持ちいいの止まらないのっ……んはぁっ♥」
おぞましいネビルザーメンを注がれた両の乳房が、まるで別の生き物のように脈動し、風船のように膨らんでゆくのがわかる。
頭が、真っ白に染まる。
フレアにとって、今まで味わってきたどんな感覚よりも強烈なものだった。ネビュラの前で自慰をしたことよりも。生まれてはじめて味わった絶頂よりも。処女喪失の快感よりも。はじめての膣内射精よりも。
「あぁぁっ♥　私のおっぱいがぁっ♥　あはぁぁっ♥　ダメェッ♥　イクゥッ♥」
フレアは腰を突き上げ、背中を大きく仰け反らせながら絶頂を迎える。
ドプッドプンっと音を立てて送り込まれてくるネビュラの子種汁。それが乳首から侵入してくる度に、フレアは絶頂に達してしまう。
「はぁ……♥　最高の射精だったわぁ♥」
言葉に違わず大量の射精を終えて、ネビュラがオナホールからふたなりペニスを引き抜くと、フレアの乳頭に刺さっていた針も抜けてゆく。
「う、そ……こん、にゃ……わたひの、おっぱい……♥」

ほんの数分前まで年相応のささやかだった膨らみは、ネビュラの両手をしっかりと受け止める豊かな肉感を帯びていた。乳頭はピンと硬く、いやらしく勃起しジンジンとした疼きは、早く触れられたいとフレアに訴えかけてくる。

「あらぁ……とってもえっちなおっぱいになったわね♥」

ネビュラの指がフレアの乳房を優しく揉みほぐす。その指使いは優しく、決して痛みを与えないように細心の注意を払っているのが伝わってきた。

今のフレアにとって、その程度の刺激はあまりにも甘い毒だった。乳房全体をマッサージするように撫で回されると、それだけでも意識が飛びそうになるほどの快感に襲われる。

「あぁんっ♥　んぅっ♥　くぅっ……んんっ♥」

「あらぁ、まだ改造ははじまったばかりなのに、またイッちゃったのぉ？」

胸から流れ込んでくる快楽の電流に、フレアは答える余裕もなく、ただ荒い呼吸を繰り返す。

「まあいいわ。ゆっくり楽しみましょうね」

「あぁんっ♥　あふぅっ♥　くふぅっ♥」

ネビュラの執拗な攻めにフレアは悶え続けるしかなかった。

「んひゃぁっ♥　あっ♥　あはぁっ♥　やめぇっ♥」

「ふふっ♥　だぁめ♥　あなたが性の快感を味わうたびに、ネビル因子はあなたの身体に浸透していくのよ♥　嫌なら気持ちよくならないようにしなさい♥」

「そん、にゃにょ♥」

送り込まれる快楽電流は、もはやフレアの意思でどうこうできるものでは到底なかった。

ぐにゅり、ぐにゅりとネビュラの指が豊乳に沈み込むたび、その官能はより強く、そして胸のサイズすらもさらに大きくなっていく。

「ほぉら、イキなさい♥　イッて、もっとスケベなおっぱいになるの♥」

「んひゃぁぁっ♥　んひぃっ♥　あはぁぁっ♥」

ネビュラのてのひらが勃起した乳頭を転がすと、フレアの全身に凄まじい快感が駆け巡った。限界を越えて耐えていたフレアも、その快感には耐えきれず、絶頂を迎える。

「あぁんっ♥　イクぅっ♥　んひゃぁぁっ♥」

淫猥に膨らんだ胸の奥から、熱いものが込み上げてゆく。それを噴き出してしまうのが危険だとわかっていても、今のフレアにはどうすることもできなかった。

ゾクゾクと腰のあたりから込み上げる、恐怖感と比例して巨大化する期待感が胸の先端へと集まって――

びゅるっ！　びゅるるっ！

まるで牧場の乳牛のように、フレアの乳頭から大量のミルクが噴き出した。

あまりにも強烈な快感に、フレアの頭には男の人の射精もこのくらい気持ちが良いのだろうか、というとりとめもない考えが生まれては弾けてゆく。

「あぁんっ♥　だめぇっ♥　イクのが止まらないのぉっ♥」

噴乳の快感は絶大で、フレアは嬌声まじりの悲鳴をあげながら、濃厚ミルクを噴き出し続ける。

「あらぁ、そんなに気持ちいいのかしらぉ？」

ネビュラはニヤつきながら、今度はただ揉むのではなく、搾るように、指を沈める。

「あひぃぃっ♥　だめぇっ♥　おっぱい壊れちゃうぅぅっ♥　あぁぁっ♥　イグぅぅっ♥」

再びの絶頂と共に、またしても盛大な量のミルクを噴射するフレア。

「うふふ、すごい量ねぇ。どんどんおっぱいも大きくなって、牛さんみたいね♥」

ネビュラは嘲笑いながら、フレアの両乳房を揉みしだいて、絞り出させるように引っ張ったり離したりする。その度に勢いよく吹き出るフレアの母乳。

「あぁぁっ♥　許してっ♥　許してぇっ♥　あはぁぁっ♥　お願いっ♥　ネビュラっ♥　あぁぁっ♥　だめぇぇっ♥」

フレアは涙を流しながら懇願するが、ネビュラは容赦なく責め立てる。

「あぁんっ♥　ダメっ♥　こんなの続けられたらおかしくなるぅ♥　んひゃうぅぅっ♥」

「いいのよ、そのままおかしくなっても。そのためにこうしているんだもの♥」

「んひぃぃっ♥　んひぃぃっ♥　んひぃぃっ♥」

フレアは白目を剥いて、絶頂を迎える。

その様子を見ながら、ネビュラは満足げな笑みを浮かべていた。

＊

リリィフレアの改造がはじまってから、既に一週間近くが経っていた。

フレアを映すモニタの映像を眺めながら、ネビュラの顔は浮かない。

「オマンコしてるときはあんなに可愛いのに、挿入れてないときは生意気なままなんだからっ……」

ネビル因子による肉体改造を受けて、日に三桁では足らない絶頂を味わわされても、リリィフレアは快楽に屈してはいなかった。

一度は快楽に従順になったように絶頂宣言までもしてみせるが、それでも決して屈服を口にしないのだ。しばらく時間を置けば、その瞳には再び正義の光を宿し、睨み返してくる。

これまで調教してきた女性は誰でも、ほんの数回ピストンしただけでネビュラの与える快楽に屈服し、自らネビル因子をねだりはじめたというのに、異常といってもいい精神力だった。

最初こそその強い精神力を楽しんでいたネビュラだったが、三日を越えたあたりから、その表情は険しさを増す一方だった。

「苦戦しているようだな。ネビュラよ」

「ネビリム様……」

「苛立つことはない。お前のやり方は間違ってはおらぬ」

「し、しかし……」

「うむ。ヤツが想像以上に強靱な精神であるのも事実。だが、強い精神には理由があろう」

「理由……」

ネビリムの言葉に、ネビュラは調教室の様子を映すモニタへと視線を向ける。そこには快楽に焼かれて身を捩りながら、それでも瞳に強い意思の炎を宿したフレアの姿が映し出されていた。

「わたしは、負けないから……マリン……！」

小さな、誰かに対してではなく、自分に向けて言い聞かせるような言葉は、しかし確かにネビュラの耳に届いていた。紫のリップに彩られた唇が笑みの形に歪んでゆく。

「なるほどねェ……ふふっ……そういうことなら……うふふふっ……」

邪悪な笑みを浮かべたまま、ネビュラは思いついた邪悪な策の準備を始めるのだった。

＊

身体が、熱い。

心臓から押しだされて、全身へと巡る血潮が、マグマのように熱い。

とりわけ熱いのは、ジンジンと疼く乳房だった。

ほんのわずかにでも身じろぎすると、それだけでたゆんと揺れる乳房から甘い官能が押し寄せてくる。

この部屋に閉じ込められて、もう一週間ほどは経っただろうか。

窓のないこの部屋で、時には明滅を繰り返すHMD（ヘッドマウントディスプレイ）を取り付けられて、全身を責め立てる機械仕掛けの陵辱者に昼も夜もなく犯され続け、時間の感覚などとっくのとうになくなっていた。

それでも、フレアの心は折れてはいなかった。



「まったく……あの小娘はいつまで耐えるつもりなのかしらね」
不意に、部屋に設置されたスピーカーから苛立ったような声が聞こえてきた。
（この、声……ネビュラ……？）
声は遠く、フレアに対して語りかけているという風ではない。
少なくともフレアが聞いていることを前提としない、独り言であるように思えた。
（だったら……逃げ出すのに役立つなにかを口走るかもしれない……）
もちろん、現実はそれほど都合の良いものではないとフレアも理解している。それでも今、フレアにできるのは、重たい胸と、ふやけるほどに蜜を吐き出す秘所から流れ込んでくる甘美な快感に耐えること以外には、それしかないのだ。
そして、諦めずにいれば必ずチャンスがやってくることを、フレアは知っている。
ドクン、ドクンと。うるさいくらいに鼓膜を揺らす心臓の音を無視して、フレアはスピーカーから流れてくるネビュラの声に耳を澄ませる。
苛立つということは、目論見が外れているということ。ただただ耐え続けることしかできないフレアにとって、せめてもの救いだった。
（絶対に、聞き逃さないんだから……！）
決意を新たに集中を強めたフレアの耳に、
「うふっ……フレアはまだ我慢なんてしてるんですか？」
聞き覚えのある声が届いた。
声は遠く、はっきりとしてはいない。しかし確かに聞こえたその声に、フレアは聞き覚えがあった。

（え……？）

だが、それはありえない。

ありえるはずがない。

だってその声の主は、ネビュラに捕まっているはずだからだ。

スピーカーから聞こえてきたその声を、聞き間違いだと否定するように、フレアは首を振り乱す。

（まりな……？）

聞こえてきた声は、まりなの声だったのだ。

彼女もネビュラに捕らえられているのなら、声が聞けたこと自体は嬉しい。

しかしネビュラに語りかけているその声音は、とても敵対者に向けるものではなかった。

「えぇ。あなたの名前をうわごとのように呟きながら、頑張って耐えてるわ」

「バカな子ですね。ネビリム様の寵愛を受け入れればとっても気持ちいいのに……わたしも、フレアの調教に加わりましょうか？」

まりなの声はとてもではないが、無理矢理に台本を読まされているようには思えなかった。閉じた瞼の裏側には、ネビュラの腕に抱きついて、小振りな胸を押しつけながら仔犬のように甘えるまりなの姿すら浮かび上がっていた。

（なんで……まりな……嘘だよね……？）

力なく首を振るフレアの耳に、しかし二人の会話は無情にも流れ込んでくる。

決して大きな声ではない。フレアに対して語りかけるわけでもないただの会話。それなのに、フレアの心は処女を散らされたとき以上の衝撃が走っていた。

「ダメよ。そんなことしたらすぐに堕ちちゃってつまらないもの。あなたがすぐに素直になってくれたから、急ぐ必要もないしね。いつまででもじっくり可愛がらせてもらうわ」
「それならお姉様……フレアなんて後回しにして、わたしを可愛がってください♥」
「あらあら。あなたのことを信じて辛抱してる親友よりも、あたしのチンポの方がいいの？」
「はい♥　だってぇ、お姉様のふたなりチンポ、気持ちよすぎるんですもの♥」
まりなの声が、先ほどにも増して熱を持つ。快楽の感触を思いだしたように、自らの股に指を向かわせたのだろうと見えるはずのない光景を幻視する。
「もう……可愛いんだから。だけどコレを独り占めできるのはフレアが堕ちるまでよ？」
「そんなぁ……♥」
「いつまでも独り占めしたいなら、親友のことを応援してあげなさい？」
ごくり、と。
まりなが喉を鳴らす音が、耳元で聞こえるようだった。
ふるふると左右に揺れるフレアの首は、もうほとんど力を持ってはいなかった。
「はぁ……あぁ……♥　フレア、フレアぁ♥　わたしが、お姉様のふたなりおちんぽ独り占めできる、ようにぃっ♥　頑張って我慢してくださいね……フレア♥」
その一言だけは、それまでの、マイクから離れた声とは違っていた。
耳元で囁くような、明確にフレアに向けたメッセージ。
普段のフレアならば、まりなを信じ、それがまやかしであると断じたことだろう。
しかし今、フレアの思考力はとても正常とは言いがたかった。

普通の女性であれば発狂していてもおかしくはない、魔の力にいくらか耐性を持つ魔法少女であろうとも普通ならばとうに屈しているはずの快楽に何日も蝕まれ続けていたのだ。

内側から湧き上がる淫欲を、まりなを守るため、という強い意思ひとつで抑えこんでいた。

そんな状況で、こともあろうに守ろうとしていた親友が、自分を売り渡すような言葉を口にしたのを聞いてなお誘惑をはね除けられるほど、ネビリム因子の侵蝕は甘いものではなかった。

ピキッ、と。

自分の中から音がしたのを、フレアは聞いた。

「生意気なフレアは丸一日あのままにしておくわ。それまでの間、先に素直になったあなたのコトをたっぷり可愛がってあげる♥」

「はい……お姉様♥」

会話と呼べるような声が聞こえたのはそこまでだった。

それ以降、スピーカーから漏れ聞こえてきたのは、甘く、蕩けた、獣のような嬌声。

間近で響く恍惚の声を聞きながら、フレアは――

＊

「さて、と……ひと晩経って、あの生意気娘はどうなってるかしらねぇ？」

監視用のカメラは調教室の一部始終を保存している。
ネビュラも、確認しようと思えばひと晩の出来事を確認することはできた。しかしネビュラはそうしなかった。
その方がより楽しめるからだ。
楽しみでたまらないと言わんばかりに頬を緩めながら、ネビュラは調教室の扉を開けた。直後だった。
「んぃいっ❤　はぁっ❤　あぁんっ❤　ぁんっ❤」
遮音壁に遮られていた、甘く甘い嬌声がネビュラの鼓膜を揺らした。
調教室の中にいるのはリリィフレアただひとり。そこから声が聞こえてきたということは、フレアの声以外にはありえない。それを知っているネビュラでさえも、一瞬、それが誰の声なのか疑問に思うほどに、その声は甘く、蕩けきっていた。
少なくとも、膣内射精を受けながらも快楽に抵抗し、生意気な視線で睨み返してきた正義のヒロインではなくなっているのは間違いなかった。
「随分とできあがってるみたいじゃない。リリィフレア❤」
フレアは、昨晩から変わらずに椅子に固定されていた。
頭に取り付けられたヘッドマウントディスプレイからは淫らな映像が、耳元のイヤホンからは淫らな言葉と音が流れ続け、乳首と女性器に取り付けられた装置はフレアを常に快楽漬けにしている。
そんな状況で一週間。普通ならば砕けていなければおかしいほどの快楽を休む間もなく受け続けて、それでもフレアは耐え続けていた――はずだった。

しかし、ネビュラの目に映った少女は、たったひと晩しか経っていないはずなのに、まるで別人となっていた。

椅子に固定されたまま、ガクガクと腰を揺らし、快楽を享受する淫らな牝。

ネビュラは自らの勝利を完全に確信し、フレアに取り付けていた快楽装置を解除する。

久方ぶりに視覚と聴覚を取り戻したフレアの蕩けた瞳が、ネビュラを見つける。

「んぅぅぅっ❤　ほぉっ❤　いぃいぃいぃっ❤　ネ、ビュラ、ぁぁあっ❤」

フレアの視線が真っ先に向かったのは、ネビュラの股間だった。

フレアの痴態に硬度を増して、形の良い乳房に触れんばかりに反り返った凶悪な肉棒に、フレアの瞳は釘付けとなっていた。ほんの一日前までは、おぞましさすら感じていたそれへと向ける視線は、嫌悪どころか恋する乙女のような――あるいは、盛りのついた獣のようですらあった。

あまりに熱の籠もった視線に、ただでさえ限界近くまで膨張していたふたなりペニスがビクンと揺れる。

「ねぇリリィフレア。もう一度聞いてあげる。ネビリム様の使徒になりなさい。ネビリム様の因子を受け入れれば、今なんかよりずぅっと気持ちよくなれるわよ」

「きも、ち、よく……なれ、る……❤」

ネビュラが肉棒を左右に振ると、フレアの視線は催眠術にかけられたように頭ごとそれを追う。左右に振られる口元からは、粘りの強い唾液が糸を引いて落ちてゆく。

「な、る……なり、ます……ネビリムの使徒にぃっ❤」

「口の利き方に気をつけなさい？　我らが淫堕神ネビリム様よ」

「はひっ♥　なりゅっ♥　ならせてくだひゃいっ♥　私を、ネビリム様の使徒にぃっ♥」

泣きそうな声での敗北宣言とともに、へこへこと、フレアの腰が拘束の限界まで情けなく揺れる。

その瞳には昨日までの、いかなる責め苦にも耐え続ける正義の炎は灯っていなかった。代わりに宿っていたのは情欲の炎。目の前の肉棒（チンポ）に媚びを売り、より多くの快楽を求める、浅ましくも貪欲な牝の欲求は、ネビュラをはじめとしたネビリムの使徒と同じものだった。

（ふふっ……あの強情なフレアが、加工した音声を聞かせてやっただけでこうも脆くなるだなんてねぇ……）

これまで散々煮え湯を飲まされてきた相手だけに、ネビュラの興奮はひとしおだった。まだ挿入どころか、触れてすらもいないのに、ふたなりペニスに注がれる懇願の眼差しだけで射精してしまいそうなほどの快感をネビュラは感じていた。

「ねぇ、フレア？　どうしてほしいの？」

「気持ちよく、なりたいですぅっ♥」

答えながら、フレアは拘束された体勢で可能な限り股を開いた。

丸一日機械に陵辱され続けていた割れ目はしかし、処女のような清楚さを保ったまま、淫売のように淫らな蜜を帯びてネビュラを誘惑するようだった。

ごくり、と。そのギャップが生み出すいやらしさに、ネビュラは思わず生唾を飲んだ。意思を強く持たなければ、作戦も何もかもをかなぐり捨てて、滅茶苦茶にしてしまいたい――そんな衝動に負けてしまいそうなほど、今のフレアは魅力的だった。

「あたしたちの仲間になるっていうなら、スケベな言葉も覚えなくちゃダメよ？」
「はぁ……♥　はぁ……♥　あぁ……♥」
言い淀むフレアの目の前に、ネビュラは剛直を差し出す。
「言ってごらんなさい。どうして欲しいのかしら？」
「私の……オマンコにぃ……ネビュラの、ネビュラお姉様のおっきなおちんぽをください……♥」
「そう。それでいいのよ。いい子ね♥」
ネビュラのふたなりペニスはフレアの秘裂に触れるか触れないかの位置で上下する。
たったそれだけで、くちゅりと音を立てて愛液が溢れた。
「あぁっ♥　しゅごいぃ♥　ちんぽ♥　本物のおちんぽぉ♥」
「そう……それじゃあ、お望みどおりにしてあげる」
「んぎぃィッ♥」
一気に根元まで突き入れられた瞬間、フレアの視界に火花が散った。
子宮口を押し潰さんばかりの勢いで叩きつけられたふたなりペニスが、そのまま最奥まで貫いたのだ。その衝撃たるや、フレアの小さな身体では受け止めきれないほどだった。
ネビル因子が急速に浸透した影響なのか、フレアの膣圧はさらに増し、まるでネビュラ専用にあつらえたかのようにぴったりと絶妙な力加減でネビュラの巨根にフィットする。
その快感に一瞬意識が飛びかけるも、ネビュラはすぐにピストン運動を開始した。その動きに合わせて、フレアの口からは獣のような喘ぎ声が漏れる。
「おおぉおぉっ♥　んぉおぉおぉっ♥」

パン、と。肌と肌がぶつかり合う音が響く度に、フレアの思考は白く塗りつぶされていく。

膣内を満たす熱い肉棒の感覚も、肉壁を削るように動く亀頭の形までも鮮明に感じ取れてしまうほどに鋭敏になった神経は、あらゆる刺激を更なる悦びへと変換する。

ネビュラの腰が打ち付けられるたびに、フレアの尻肉は波を打ち、フレアのふたなりペニスはぶるんと揺れながら先走り汁を撒き散らす。

「おぉおおおぉおンんんん！」

ネビュラの腰の動きが一段と激しくなる。絶頂が近いことを察したフレアは、自らもまた快楽を得ようと膣内を締め付ける。

ネビュラもまた、既に限界は近かった。

快楽を受け入れたフレアの膣内はこれまで以上に貪欲に肉棒に絡みついて、百戦錬磨のネビュラすらも、気を抜けば搾り取られかねない極上の名器と化していた。

「あぁんっ❤　ねぇフレアぁ、わかるかしら？　あたしのチンポをドクドクッてネビルザーメンが込み上げてきてるのぉ❤」

「わかりゅっ❤　わかりまひゅうっ❤」

かくんかくんと、壊れた玩具のようにフレアは頷く。

過敏なほどに鋭敏になった膣の感覚は、ネビュラの肉棒を込み上げる邪悪な劣情の存在をはっきりと感じとっていた。ほんの数分前までおぞましさすら感じていたそれが、今はただただ待ち遠しい。

「もうそろそろ射精ちゃうけど、どこに欲しいの？　抜いてほしいならそう言いなさい？

ちゃあんとあなたの希望を叶えてあげる」
「膣内(ナカ)っ♥　膣内(ナカ)にぃっ♥　子宮(オク)に射精してぇっ♥」
「あらいいの？　今のあなたがこぉんな濃厚なネビルエナジーを射精されたら、もう正義の魔法少女には戻れないわよ？」
答えなどわかっているはずなのに、意地悪くネビュラが確認の問いかけを投げる。
そんな陵辱者に、フレアはしかし、緩んだ唇を軽く尖らせることで不服を表現しただけだった。トロンと蕩けた瞳には、当初のような敵意や、正義の意思など残されてはいない。
「あぁんっ♥　意地悪言わないでぇっ♥　いいのっ♥　もう全部どうでもいいっ♥　気持ちよくなりたいのぉっ♥　くだひゃいっ♥　ネビリム様のネビルザーメン、リリィフレアのおまんこに射精(どぴゅどぴゅ)　精してぇぇっ♥」
淫らなおねだりが口ばかりでないと示すように、フレアの脚がネビュラの腰に絡み、膣内への射精をねだってみせる。
これまで散々手を焼かされてきたヒロインの完全な屈服はネビュラの支配欲を満たすに充分なものだった。だがそれだけではない。純粋に一匹の牝として、目の前の魔法少女は羽化しようとしているのだとネビュラは確信し、その整った顔立ちを笑みのかたちに歪ませる。
「んふっ♥　いいおねだりよ。お望み通り、たっぷり注いであげるわぁっ！」
これまでの抽送よりもひときわ強く、ネビュラが腰を突きだす。
力強い突き込みに、フレアの華奢な肢体は潰され、解剖中のカエルのような無様を晒すも、その顔に苦悶や屈辱の色はなく、恍惚の色だけがあった。

キュウッ、キュウッ、と。

これから注ぎ込まれるものを、わずかな一滴さえも無駄にしてたまるものかと言わんばかりにフレアの膣がネビュラの巨根を締め付ける。それが、限界近くまで昂ぶったネビュラの限界を越えさせた。

「受け取りなさいっ！　ネビリム様の寵愛をっ！」

びゅるっ！　びゅるるっ！　るるるるるるるるぅっ！

マグマのように熱い欲棒の奔流が、ネビュラのふたなりペニスを通じてフレアの神聖な場所へと注がれる。

「あぁぁぁぁっ❤　くるっ❤　くるぅぅぅぅっ❤　ネビルザーメンっ、おまんこに注がれてるぅぅっ❤」

下腹――ちょうど体内であればネビル因子を注がれた子宮のあるであろう位置に、光が浮かび上がる。どこか淫靡な輝きは、フレアの下腹部に子宮にも似た淫猥な紋様を刻んでゆく。

「はぁ、んっ❤　うぅぅんっ❤」

どくっ、どくどくどくっ、と。

もっと射精したい、もっと注ぎ込みたいというネビュラの欲望に、もっと射精されたい、もっと注がれたいというフレアの欲望が重なって、常人ではあり得ないほどの勢いと量の精が注ぎ込まれてゆく。

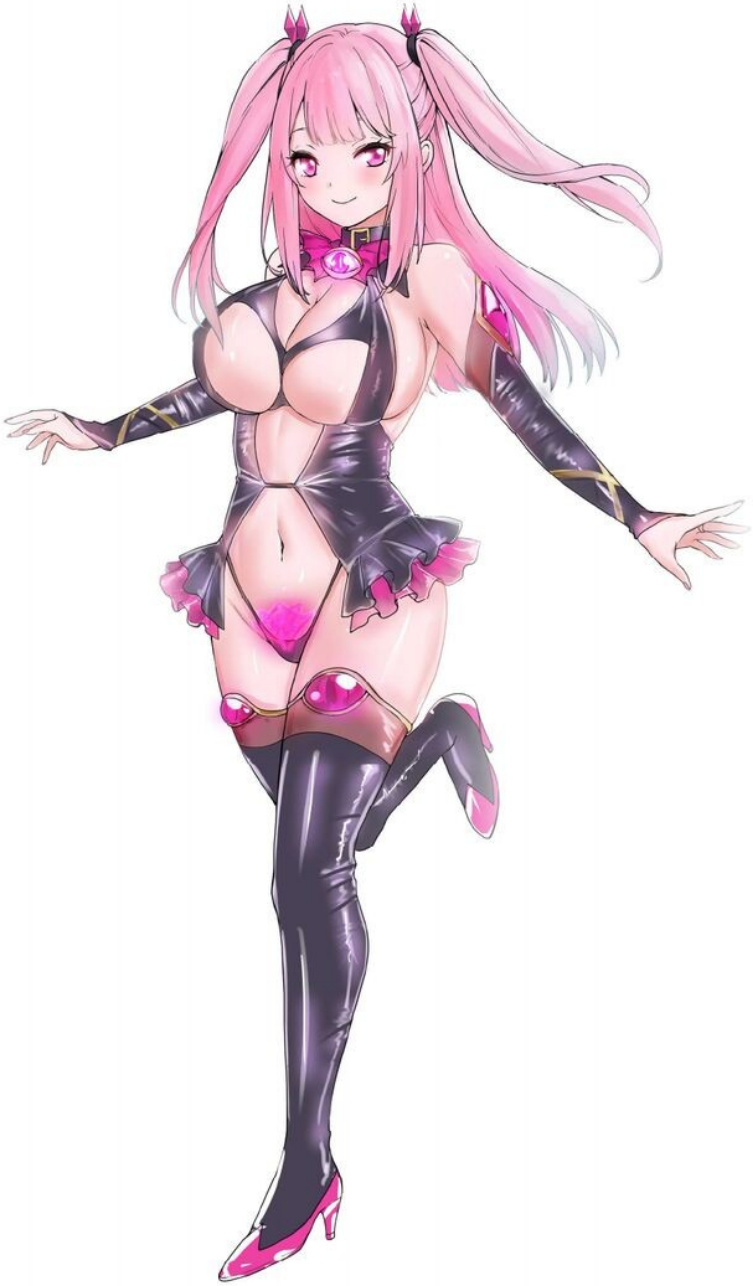
変わる。

フレアは魔法少女として三年間、数えきれないほど変身を繰り返してきた。

それゆえに、フレアほど変身の感覚を熟知した者はそうはいない。
だからこそ、フレアにはわかる。これから起こる変質は、これまでの変身とは明らかに違うことを。
一度そうなれば、もう二度と戻れない。たとえ変身を解除したとしても、そうする前とは致命的に何かが変わってしまうのだということを、フレアは本能で察していた。
そしてそれが――言いようもないほどの快楽を伴うであろうことも。
にぃ、と。
不可逆の変質への、恐怖を遙かに上回る期待に、フレアの頬が緩む。
神崎フレアという人間を知る者が見れば、目を疑うような、淫らで邪悪な笑みだった。
ゾクゾクッ、と、子宮から期待とともに、口にすべき言葉が込み上げてくる。
「んっ……❤　あぁっ❤　はぁ、んっ……❤」
それを口にすると思っただけで、甘やかな絶頂が全身を駆け抜ける。
これ以上は我慢できなくて、フレアは大きく息を吸い込んだ。火照り、熱されたフレアの臓腑に、甘い香りを帯びた媚薬空気が取り込まれ、フレアの火照りを冷ますどころか加熱させる。
「ネビルエナジー・メイクアップ❤」
かつての変身の起句を歪めた、冒涜的な詠唱に、子宮に注がれたネビル因子が応える。
魔法界の賢者から授かった光の力に、ネビル因子が染み込んでゆく。
これまで頑なに侵蝕を拒み続けてきた光の力は、しかしその持ち主が受け入れたことで、一瞬のうちにネビル因子の侵蝕を受け入れた。

トクン、と心臓が鼓動するように、フレアの下腹に浮かび上がった淫紋が発光する。
無惨にも破れていたコスチュームは黒紫の光へと還元され、淫紋へと集まってゆく。
トクンッと、もう一度淫紋が輝きを強めたかと思うと、フレアの全身を妖しげな光が覆ってゆく。
起きている現象そのものは、魔法少女への変身のときのそれと酷似している。だがそれらが同じであるなどとは、誰も思わないだろう。
形作られてゆくのは、リリィフレアの印象をわずかに残しつつもどこかネビュラのボンデージにも似た、妖艶なコスチューム。
頭ほどの大きさにまで膨らんだ爆乳は、どこかコウモリじみた形状の布地に覆われる。形の良い乳房が持ち上げられ、谷間はより深く強調された。
スカートは申し訳程度の長さで腰の左右を飾るだけ。肝心の股間と尻はほとんど丸出しで、マイクロビキニのような小さな布地が割れ目を隠してこそいるものの、内側からとめどなく溢れ出す淫らな蜜にぐっしょりと濡れていた。
むっちりと肉感を帯びたふとももから、毒々しいほどに鮮やかな蛍光ピンクのペディキュアに彩られた爪先までを覆うのは黒のハイソックス。ネビュラのボンデージにも似たエナメルのような光沢が、照明を妖しく照り返す。足先を包むのは濃いピンクのハイヒール。肉感の増した二の腕から手首までを脚と同様の布地が覆う。
しかし、変化はそこまでだった。
「う、ん、ぅぅっ……」
フレアの顔が、苦悶に歪む。

その理由はフレアのツインテールを結うリボンが放つ、優しい光だった。
それはマリン――まりなからもらった、友情の証。
まるでまりなの気持ちを代弁するかのように、リボンから生まれた光が邪悪な光を押し返そうとして――
ほろりと、ほどけて床に落ちた。
「あはっ❤」
もう、そんなものはいらないとでも言いたげに、フレアは笑い、一瞬こそ止まった変身は再開する。
肩に、ふとももに、そして首に、ギョロリとした目玉のような不気味な宝玉が浮かびあがり、同質の結晶がリボンの代わりに髪を結う。
最後に首に、被所有物であることを示すように黒革の首輪が形成されて、変身は完了した。
そこにいたのはもはや、神崎ほむらでもなければ、リリィフレアでもなかった。
あどけなくも整った顔立ちはそのままに、娼婦のような色香を表情に浮かべた淫魔。
「今の気分はいかが？　リリィ――いえ、ネビルフレア」
ねっとりと、甘い響きで問いかけながら、ネビュラはフレアの割れ目に指を潜らせる。
精液と愛液の混じり合ったドロドロの液体を溢れさせながら、しかしフレアは嫌がる様子もなくネビュラに笑みを返す。見る者の劣情を駆り立て、堕落させるに相応しい、暗黒の太陽の笑みを。



「最高の気分です。ネビュラお姉様ぁ❤」

うっとりと、耳が蕩けるほどの猫撫で声で、リリィフレアは――否、ネビルフレアは、自らを生まれ変わらせてくれた愛しのお姉様へと答えを返す。

二人の視線が重なって、そのままなんの躊躇もなく唇が重ね合わされる。

舌と舌とが絡み合う、淫猥なオーラルセックス。もはやフレアはされるがままではない。愛しのお姉様に奉仕するように、自ら舌を絡めてゆく。

そこにはもう、ネビュラに立ち向かい続けてきた正義のヒロインの面影は、どこにも残されてはいなかった。

◆シーン4

「ほむらちゃん……」

ほむらが失踪してから、二週間が経過していた。

その間、まりなは暇さえあれば街中を駆け回り、ほむらのことを探し回っていた。

まりなたちが魔法少女であることは、友人らはもちろんのこと、家族にさえも秘密にされている。それゆえに家族相手であっても、魔法少女だから誘拐されたのかもしれないと教えることはできないことが、まりなの胸に罪悪感として残っていた。

「お願いです……無事でいてください……」

元気いっぱいなほむらの顔を思い浮かべ、まりなは拳を握り締める。

この日、まりなが訪れていたのは、駅前からやや離れた場所にあるホテル街だった。

まりなのような年齢の子供が来るような場所ではなく、制服姿は至極浮いている。

もちろん、まりなは遊びにきたわけではないし、こんな状況でなくとも遊びにきたこともない。そんなまりながホテル街を訪れたのには当然理由があった。

ネビリムの使徒たちが信奉する淫堕神ネビリムは淫欲を司る邪神。もし彼らの本拠地があるならば、その可能性が高いのは、街の中で最も欲望の集まるホテル街だろうという推理である。

ほむらの家族や警察は、ほむらの行方を捜索している。しかしホテル街などほとんど調べているはずがない。まりなと同様、ほむらもまたこのような場所に来るような性格ではないのだから。

ほむらが魔法少女であることを知っているのは、相棒であるまりなだけ。誰にもその事実を話すことができない以上、ホテル街を探してほしいなどと頼んだところで根拠に乏しい上、ほむらの名誉を穢すことにもなりかねない。

「わたしが……ほむらちゃんを見つけます……」

ときに警察に補導されそうになり、魔法少女の力を使って逃げることを繰り返しながら、街中の至るところを探し回っていると、まりなの視界の端に、見覚えのあるツインテールが映り込んだ。

「ほむらちゃん……！」

ビルの角を曲がり、路地裏へと入っていったその髪は、まりなが毎日のように見つめ、頭の中に思い描き、夢にまで見た親友のものに間違いなかった。

確信を持って、まりなは棒のようになった足に鞭打ち、ビルの角まで走る。

「ほむらちゃんっ！」

息を切らせながら覗き込んだ路地裏には、人の姿はなかった。

あるのは打ちっぱなしのコンクリートと、室外機にゴミ箱の群れ。そして片付けられずにいる吐瀉物のあとくらいだった。

「……」

ほむらが失踪してからの二週間、見つけたと思って近づいて、別人だったことは何度もあった。そのたびに今度こそは間違いないと思って、裏切られ続けてきた。

「また、見間違いだったんでしょうか……」

落胆の息を吐きながら、それでももしかしたらという希望を捨てきれずに、まりなは薄

暗い路地裏へと踏み入れる。エアコンの室外機が吐き出す新鮮とは言いがたい空気が、路地裏を独特の生暖かさで包んでいた。

最初は早足だった足取りも、次第に重くなってゆく。

（どこに行っちゃったんですか……ほむらちゃん……）

「ねぇ、まりな。誰を探してるの？」

耳元で、ほむらの声が聞こえたような気がした。

それもまた、この二週間、何度も感じた幻聴。しかしその声は、まりなが知るほむらの声でありながら、ほむらのものとは思えない、甘い色香を帯びていた。その違和感が、まりなを振り向かせる。

「え……？」

そこには確かにほむらの姿があった。

見間違いでもなければ、目の錯覚でもない。二週間ずっと会いたかった親友であり相棒の姿がそこにはあった。

「ほむら、ちゃん……？」

ずっと会いたかった親友と出会えたというのに、今度こそ間違いでないというのに、思わず疑問形となったのは、ほむらの格好のせいだった。

ほむらが身に着けていたのは、見ているだけで恥ずかしくて目を逸らしたくなるほどの淫猥な衣装だった。全体としては極めて布地の少ないボディコンシャスか、あるいはボンデージに属するのかもしれない。リリィフレアをイメージしているようなピンク色の布地はエナメル質の光沢を帯びて、ほむらの肢体にぐにゅりと食い込み、官能的な肉感を押し

上げていた。まりなの知るほむらは、それほど肉感的ではなかった。ふとももや腰回りもそうだが、何よりも目が行くのはその胸元。両手に収まらないほどの量感の母性は、深い谷間を形作り、その先端はぷっくりと膨らんで、布地にしっかり隠れているのにその形状まではっきりと見て取れた。

まるで痴女のようなその姿は、まりなの知るほむらがするはずのないものだった。しかし同時に、親友であるからこそ、彼女が他でもない、神崎ほむら本人であることがまりなにはわかる。だからこその混乱が、まりなの頭の中で渦巻いていた。

「そうだよ。まりなぁ❤」

混乱するまりなに、ほむらが微笑みかける。

いつも、そうされるだけで胸を温かいもので満たしてくれた太陽の笑みではない。このあたりで夜に、客に媚びを売る娼婦のような、妖艶な笑み。

それでもそれは——間違いなく、ほむらだった。

「よかった……ほむらちゃん……」

わからないことも、混乱もある。だがそれ以上に、無事にほむらに再会できたことがまりなにとっては大切だった。

気付けばまりなの視界は歪んでいた。それが自身の涙によるものだと、まりなは遅れて理解した。

「ほむらちゃん……二週間もいなくなって……一体どうしていたんですか？」

涙を拭いながらの問いかけに、ほむらは何故か、艶然とした笑みを浮かべた。

「私ね……ネビュラに捕まったんだ」

滔々と、ほむらは語り出す。

そこに哀しみの色はなく、どこか熱を帯びた声は、まりなの耳を惹きつける。

「やっぱり……そうだったんですか……」

「身体中いじくられて、いやらしいことといっぱいされたんだ……♥　おっぱいだって、こんなにおっきくなっちゃった……♥」

自らに起きた出来事を、変化を、辛い記憶としてではなく、まるで誇るようにほむらは語る。ピンクのエナメルが食い込んだ豊乳が、これもまた肉感を増した二の腕に挟まれて淫猥に変形し、谷間をさらに深くする。まりなの知るほむらがするはずのない仕草に、しかしまりなは引き込まれていた。

「ごめん、なさいっ……わたしは、ほむらちゃんの相棒なのに……そんなときに、なんにもできなくって……」

ほむらと再会できたことへの喜びと、ほむらが苦しんでいたであろうときになにもできなかったことへの罪悪感とが混ざり合い、まりなの心を揺るがしていた。

だけどほむらは、そんなまりなの謝罪の言葉に、首を小さく横に振った。

「謝らなくっていいよ。私の方こそ、心配かけてごめんね」

ほむらの声が鼓膜を揺らすたび、まりなの心臓の鼓動は大きく、そして早くなっていく。いつの間にか口の中に溜まっていた唾液を飲み込むと、ごくり、と嚥下の音がほむらに聞こえてしまったのではないかと思うくらいに大きく鳴る。

それに気付いているのかいないのか、ほむらはさらに一歩、近づいてくる。

不思議な圧に気圧されて、まりなの背中がビルの壁面に触れてもほむらは止まらなかっ

た。制服越しに、豊乳の柔らかな感触がまりなのささやかな胸に触れて、ぐにゅり、といやらしく変形するのがわかる。

「むしろ――感謝してるくらいだもん……♥」

舌先がうっすらと耳たぶを掠めるほどの近距離で、吐息そのもので鼓膜が揺らされる感覚。甘い官能が耳から全身へと広がっていき、まりなの身体はビクンと震えた。

「えっ……？」

言葉の意味を受け取りかねて戸惑うまりなに、ほむらはさらに身体を密着させてくる。どくん、どくんと、高鳴るほむらの心音が伝わってくるのを、まりなは感じる。二人の心臓の鼓動が重なって、ひどい風邪に罹ったときのように身体中が熱を帯びてゆく。

「んっ……♥」

唇に、柔らかい感触があった。

くちゅり、と、どこかいやらしい、蜜のような音。

あまりに突然の出来事で、まりなは一瞬、なにが起こったのかわからなかった。

唇に押し当てられた柔らかいものが、まりなの唇を押し拡げるように開いて、その中から濡れた、熱いものが伸びてきてまりなの口の中へと入ってきて、ようやく自分が、ほむらにキスされたのだと気付いた。

（ほむら、ちゃん……？）

突然に次ぐ突然のことに、まりなの頭は完全に混乱していた。

まりなの知るほむらは、少しえっちなキスの描写がある漫画を読んだだけで、丸一日真っ赤になるくらいの初心（ウブ）だった。

触れ合う程度のキスだって、したことはなかっただろう。

「んぁ……❤」

しかし今、ほむらの舌は、まりなの歯茎を舌先で愛撫し、喘ぎに開かれた瞬間を狙い澄ましまして、口の中へと侵入を進める。

まりなにとっても、はじめてのキスだった。

妄想の中では幾度となくほむらと交わしたキス。しかし現実のほむらは、その何倍も淫猥にまりなの口内を責め立ててくる。ただ無秩序に舌を口の中に突き入れるのではない。舌を器用に使って、まりなの口内を愛撫してきていた。

（ほむら、ちゃん……）

拒絶することは簡単だろう。ほんの少し、肩を押せばそれでいい。

しかしそんな簡単なことが、今のまりなにはできなかった。

ほむらがこうなってしまった原因は、そうなる前に助け出すことのできなかった自分の責任だと思ったからだ。

淫堕神ネビリムは、人の心の弱みにつけ込んで、その淫らな欲求を膨らませ、堕落させる。二週間近くもの間ネビリムの使徒に捕らえられていたほむらは、どれほどの快楽に晒され、そして耐え続けていたのだろうか。

そんな場所から、どれほどの意志力を持って逃げ出してきたのか。

それを思えば、抑えきれない劣情を受け止めることを、嫌だとは思わなかった。

（たとえほむらちゃんがどんなにえっちになっても……わたしが、受け止めますから……）

自らの罪のように、まりなはほむらのキスを受け入れた。ほんのりと、蜂蜜のように甘

さすら感じるほむらの唾液を、まりなは噛み締めるように飲み込む。
「んっ……ちゅっ……♥」
絡められる舌に抵抗することなく、されるがままに愛撫を受ける。
ほむらの舌はそれそのものが別の生き物のように自在に動いて、まりなの口内を絶妙な力加減で撫でてゆく。
「んっ♥　ぁ、ぅんっ……♥」
まるで敏感な性感帯を刺激したときのような、痺れるような快感が口内から全身へと広がってゆく。飲んだことなどないものの、酒を飲んだときにはこんな気分になるのだろうか、と思うような、ふわふわとした不思議な恍惚感があった。いつしかまりなも、自分の方からほむらの舌に、自らの舌を絡めはじめていた。
くちゅ、くちゅり、れろっ、ちゅっ。
人の往来も少なくはない表通りから、ほんの数メートルしか離れていないその場所で、この街の守護者であるはずの魔法少女たちは舌を絡め、淫らな水音を響かせていた。
「まりなって結構オナニーしてるでしょ？」
「なん、れ、それをっ……」
舌と舌を絡め合ったまま、呂律の回らない状態で、ほむらに問われて、まりなはビクッと身体を震わせた。図星だったからだ。
自分が、性欲の強い人間だとまりなは自覚している。
毎日のように自慰をしていたし、そのオカズは決まってほむらだった。
明るく、優しい親友を性欲の対象にする行為に罪悪感を抱き、淫堕神の使徒と戦う自分

がそんなではいけないと思っていても、まりなはそれをやめられなかった。
「やっぱり……だってまりな、すっごくえっちなにおいがするもん」
「そん、なぁ……♥」
いやらしい人間であること自体よりも、それをほむらに知られてしまったことが何よりも恥ずかしかった。どろりとした唾液が、ほむらの舌を樋のようにして流し込まれてくる。
甘い。
舌で、口の中全体で、ほむらの味を感じてから——ごくっ、と喉を鳴らして嚥下する。
ほむらの甘い唾液を呑み下すたび、頭の中に霞がかかってゆくような感覚があった。
身体が熱を持ち、胸や股間が切なくなる。
そんな疼きを見通したように、ほむらの手指はまりなの股間、飾り気のない白のショーツのクロッチに触れる。
くちゅっ。
「あはっ♥　まりなったら、キスだけで濡れちゃってる……えっちなんだ♥」
ほむらに耳元でなじられた瞬間、まりなの股間から頭のてっぺんまでを、電流のようなものが駆け上がった。
「んぅっ♥　らめ、れすっ♥　言わ、ないれぇ♥」
「何を言っちゃダメなの？　まりながとぉってもスケベな女の子、ってコト？」
耳元で囁かれる優しい罵倒に、まりなの身体はさらに昂ぶっていく。
「あっ♥　ちがっ、そんなんじゃっ……ひぃんっ♥」
「違わないよねぇ？　こんなに濡らしちゃって……まりなってば変態さんなのかな？」

「そんなっ……そんなことっ……ないですっ……！」
「本当に？」
「本当……にっ……んぁっ！？」
ほむらの人差し指が、秘裂をなぞり上げる。
びくんっ、と、まりなの腰が跳ねた。



「じゃあさ……こ～いうことされても感じたりしないよね？」
そう言ってほむらは、左手を制服のスカートの内側へ潜り込ませる。
「んひぃっ♥　らめっ♥　らめれひゅっ♥　ほむらひゃっ♥」
布地の上からでもわかるほどに硬く張り詰めたクリトリスを、ほむらは右手の親指で押し潰していた。
ぐりゅっと、容赦の欠片もない手つき。
それは痛みを伴うはずなのに、まりなの口から漏れたのは苦痛の声ではなく、甘く蕩けた声音だった。
くにゅり、くりゅりっ。肉豆を弄ぶように転がされ、そのたびにまりなの意識は白く濁る。
「ふにゅ、にゅ、んっ♥　ふぁ♥　ぁ♥」
「ふふっ、気持ちよくなってきたみたいだね」
優しく甘い声でなぶられながら、まりなはさらに深く絶頂へと追いやられてゆく。
「まりなは可愛いなぁ。もっといじめたくなっちゃう……♥」
「んにゅっ♥　ほむ、ほむらひゃんっ……だめっ、もう、イっ――――んにょおおおぉ♥」
「あれ、もしかしてイッちゃった？」
「はひっ……は、はいぃ……♥」
「そっかぁ。まだ触っただけなのに……まりなってヘンタイさんだぁ♥」
「は、はいっ……わたしはっ、へんたい……でしゅ……♥」
「うん♪　そうだよまりなはえっちな子だよ……だからさ、ちゃんと言ってごらん……『私

は淫乱マゾ女です』って……ほら、言えるかな？」
「は、はい……♥　わ、わた、しは……いんら、まぞおんな、です……♥」
「ふふっ、えらいねぇ。ちゃんと言えたから今度は褒めてあげる……よしよし、いい子だねまりな」
「ぁ……♥」
自分自身の蜜に濡れた手で頭を撫でられて、まりなは猫のように目を細める。
「いい子のまりなには、ご褒美をあげないと……ね♥」
ほむらは、まりなのショーツに手をかけると一気に引き下ろした。
「きゃっ……！　な、なにをするんですかほむらちゃんっ……！」
「なにって……ごほうびをあげるんだよ」
「ご、ごほうびって……ぁ♥」
ほむらの視線は、露わになったまりなの秘処へと注がれていた。
そこは既に愛液によってぐしょ濡れになっていた。
「すごい……こんなにえっちなお汁垂らして……それにここもおっきしてる……♥」
まりなの両足を開き、その間に割入るように身体を入れると、ほむらはその中心にある割れ目に顔を近づける。
「そんなに見つめたらっ……んぁっ♥」
恥じらうまりなを黙らせるように、その奥に隠れている小さな突起を唇に含んだ。
ちゅるるるるるるっ。
「ふにゃあぁっ♥　ほむらっ、ほむらちゃっ♥」

（ほむらちゃんのお口が、わたしのクリトリス食べてるぅっ❤）

くちゅっ、くちゅりっ。

ほむらの舌が、まりなの肉芽を舐め回す。

敏感すぎるそこは舌が這う度に強烈な快感を生み、まりなの脳を焦がしてゆく。

「そんな吸われたらっ、わたしっ――ふにゅうぅっ！」

まりなの身体がビクンと震える。再び達したのだ。

ぷしゅうっ！

霧吹きのような透明な飛沫がまりなの股間から噴き出して、ほむらの蕩けた顔を濡らす。

それがいけないことだとわかっていて、止めたいと思ってもまりなの身体はもう、まりなの思い通りに動いてはくれなかった。

親友を穢す背徳の興奮に、イキ潮はより勢いよく飛沫いてゆく。

「ふふっ、イっちゃったんだ……えっちだなぁ、まりなは……」

「はーっ、はっ、はっ、はっ……ほむらちゃん……」

「そろそろ、いいかな……❤」

呼吸を整えようと息を荒げるまりなを見やりながら、ほむらは布地の少ない衣装の股間を指でズラしてみせる。まりなの潤んだ瞳は、すぐさま露わになった割れ目に引き寄せられた。

「あ、ぁ……❤」

ぴたりと閉じた桜色の割れ目は、かたちこそ清楚さを保ちながらも、興奮を示すようにぐっちょりと湿り、ぬるりと光を照り返す。あまりにも淫靡な光景に、まりなの興奮はさ

らに昂ぶってゆく。その視線に気付いたのか、ほむらは自らの手でその裂け目を割り開くようにしてみせた。淫らに開かれた花弁の奥からはとろとろと粘ついた液体が零れ落ちてくる。

「ふふっ……♥　まりなのおまんこもぐちゅぐちゅ♥」

言いながら、ほむらは濡れそぼった割れ目を、まりなの割れ目へと触れさせた。

くちゅっ。

「んっ……♥」「んっ……♥」

ほんの少しの接触にもかかわらず、二人の口から甘い吐息が漏れた。

「んっ……ほむら、ちゃん……」

「まりなぁ……んっ♥」

再び唇が重ねられ、まりなもそれに応える。

唇と陰唇と、上下の唇を重ね合いながら、二人は互いの秘所を擦り合わせる。

「んっ♥　んんっ♥　んっ♥」

「あっ♥　あぁっ♥　はぁっ♥」

お互いの分泌物で濡れた性器が擦れ合うたび、ちゅくちゅくという音が響き、同時に快感に喘ぎ声を上げる。やがて快楽の波が押し寄せてきた頃、ほむらは絶頂を迎えるための動きに移った。

まりなの腰が小刻みに動き始め、その動作は次第に早く、大きくなっていく。

「んっ♥　あぁっ♥　ほむらちゃんの、アソコっ、わたしの、アソコに、当たってっ、イクッ、またイッちゃいますぅっ♥」

「いいよ、まりなっ❤　ヘンタイまりなっ❤」
「はいぃっ❤　わたしっ、へんたいまりなですっ❤　だからっ、ほむらひゃんもっ❤　いっしょにぃっ❤」
「うんっ❤　一緒にイこうっ❤　まりなぁっ❤」
「「イっ――――んにゅうううううううううぅぅっ❤」」
身体だけでなく、心までもが重なるような感覚。
意識がふわりと浮かび上がり、空高くへと弾き上げられる。
だけどそれは決して不快な感覚ではない。むしろ幸福ですらあった。
真っ白に弾ける視界。
絶頂の瞬間に放たれた愛液は二人の間に糸を引き、そして消えてゆく。
今までの人生で味わった中で最高の快感に、まりなの意識は暗闇へと沈んでゆく。
「――ふふっ、まりなったら、ホントにヘンタイなんだから……きっとお姉様にも気に入ってもらえるよ❤」
耳に届いた親友の声を理解する前に、まりなの意識は途切れた。

◆シーン5

「こ、こは……」

まりなが目を覚ましたのは、どこかの部屋の中。

辺りには本棚やベッドなどの家具が置いてあるが、窓はない。

どうやら地下牢のようで、部屋の中にはまりな以外に誰もいない。

「確か、わたしは……そうだ、ほむらちゃんに会って……」

そこで記憶がフラッシュバックする。

再会したほむらとの淫行とその快感を思い出し、まりなの身体がぶるりと震えた。

思い出した途端に、顔が熱くなる。

冷静になって考えれば、あんなことをするのが本物のほむらであるはずがないのだ。だとするならば、その正体もおのずとわかる。

「……ネビリムの使徒の罠、ということでしょうね」

自分の中で結論づけて、まりなは怒りに拳を握り締める。

「セイントエナジー・メイクアップ！」

呪文を唱えてコスチュームをまとったのとほぼ同時、部屋の唯一の扉が開いた。

「目が覚めたみたいねぇ、リリィマリン」

「ネビュラッ！」

現れたのは、いつになく機嫌の良いネビュラだった。

「やっぱり、あのほむらちゃんは……フレアは偽物だったんですね」

「あら。もしかしたら偽物かも、なんて頭が働くだけ、ほむらよりも利口なのね」
「っ……本物のフレアはどこにいるんですか？」
「この状況でも自分よりも仲間のことが心配？　似たもの同士ねぇ。あの子もずっとあなたのことを心配してたわよぉ」
「ネビュラッ！」
「ふふっ、怖い顔しないで。すぐに会わせてあげるわ。いらっしゃい」
ネビュラが指を鳴らすと、彼女が入ってきた扉が再び開く。
そこから入ってきたのは、マリンがずっと会いたかったほむらの姿だった。
制服姿のほむらはしかし、敵地にいるというのに、まるで自宅で寛ぐかのような足取りで部屋に入ってくる。
「いらっしゃい、まりな……♥」
「ほむらちゃん……なの……？」
マリンの言葉が疑問形になったのは、それがまりなのよく知るほむらであれば、浮かべるはずのない邪悪で妖艶な笑みだったからだ。
路地裏で出会ったときには、ただ再会できた喜びで見えていなかったものが、今ははっきりと見える。だからこそ今目の前にいるほむらが本人以外であるはずがないという思いと、ほむらであるとは思えないという思いとがぶつかり合う。
「私は正真正銘、本物の神崎ほむらだよ」
ほむらの浮かべる艶然とした笑みに、マリンの脳裏に意識を失う直前の淫らな行為とその快感とが蘇った。

「そう……あたしの可愛いしもべの、ね♥」
「嘘……そんなの、嘘です……」
告げられた言葉を信じられずに、マリンは受け入れを拒むように首を振る。
そんなマリンに見せつけるように、ネビュラは女性にしては高い身長を屈ませて、ほむらの尻へと手を伸ばした。
「んっ……♥」
前から見てもその存在が見て取れるほどに淫猥に膨らんだほむらの尻を、ネビュラの手指が撫でるどころか捏ね回す。ぐにゅ、ぐにゅう、と、尻肉が変形すると、ほむらはしかし、振り払うどころか嫌がるそぶりすら見せず、むしろ尻をネビュラの手の平に押しつけるように動く。
「んっ……♥　あぁ……♥」
「んふっ♥　ほむらのお尻、揉み心地抜群で最高よ。揉まれただけでアソコもぐちょぐちょになっちゃう淫乱なトコロもね」
「ありがとうございます、お姉様ぁ♥」
ネビュラの褒め言葉に、身体を震わせて歓喜を示すほむら。増した肉感がそれに合わせて官能的に揺れる。
「そろそろマリンにあなたの本当の姿を見せてあげたらどう？」
「はい、お姉様……♥　まりな、見せてあげるね。本当の、私を……♥」
ほむらは大きく息を吸うと、艶然とした笑みを浮かべてその言葉を口にした。
「ネビルエナジー・メイクアップ♥」

嬌声にも似た、甘く、蕩けるような発声。

直後、ほむらの下腹部に子宮を模したような淫らな紋様が浮かび上がる。紋様からは魔法少女への変身と似て非なる妖しげな輝きが迸り、ほむらの身体を愛撫するように覆っていく。それが、人々を欲望に堕落させる淫堕神ネビリムの因子――ネビル因子であることはマリンの目にも明らかだった。

一瞬のうちに、ほむらにまとわりついた光はほどけ、内側からはネビュラの装束にも似た淫靡な衣装をまとったほむらの姿が露わになった。

「魔法少女リリィフレア――改め、ネビリム様の忠実なるしもべ、ネビルフレア♥」

人々へと希望を与えるための名乗りではない。

淫らな淫らな産声のように、フレアは自らの名を名乗りあげる。

「ふふっ、いやらしくって、邪悪で……よく似合ってるわよ。フレア」

「ありがとうございます、お姉さまぁ……♥」

「それじゃあフレア。最後の試験よ。大事な大事な親友を、あたしに、そしてネビリム様に捧げなさい。上手にできたらたっぷりご褒美をあげるわよ♥」

「ネビュラっ！」

親友を見るも無惨な姿へと変えてしまった宿敵に、マリンは飛びかかろうとするものの、それよりも早くフレアが間に割り込んだ。

そんな二人を眺めるように、ネビュラは備え付けられた椅子に深く腰を下ろす。

「ふ、フレアッ……正気に、戻ってくださいっ……」

「私は正気だよ。ただ、えっちなことがこんなに素敵なことだって知らなかっただけだっ

たの」

言いながら、自分が知った性の快楽を誇るように、フレアは自らの割れ目をなぞる。

興奮によって湿った割れ目は、ほんのわずか指先で撫でただけで、くちゅりと卑猥な音を立てた。変わり果てた親友の行動に、マリンは凍りつく。

「マリンってさ……私のこと、好きなんでしょ？」

「そ、れは……」

あどけない顔立ちとは裏腹の、艶やかな表情で微笑みかけられただけで、マリンは心臓がドクンと跳ね上がるのを感じる。

フレアの指摘は正しかったからだ。

まりなは子供の頃から男性が苦手だった。顔を合わせるのも苦手というほど極端ではないし、普通に生活する上でそれが理由で不都合を被ったことがあるわけでもない。しかしどうしても、男性に対する恋愛感情というものがまりなには理解できなかった。

友達の話や、物語に出てくる同年代や、あるいは年上の男性への憧れや思慕の代わりに、まりなの胸に積もっていったのは、同性への感情。その中でも、人付き合いがあまり得意ではないまりなにとって、生まれてはじめてできた親友と呼べる存在――フレアは、特別な存在だった。

「ネビュラお姉様に調教していただいて、えっちな欲望（キモチ）を知ったおかげで、マリンの――まりなのキモチがわかるようになったんだ。気付いてあげられなくてごめんね。ちょっとびっくりしたけど、嬉しかったよ。まりなのキモチを知れて」

「ほむら、ちゃん……」

まりなは己の胸に宿った感情が、消せないものだと知りつつも、一般的なものではないことも理解していた。友情とは異なるその想いを知られることで、親友としてのほむらさえも失ってしまうことを恐れた。

それゆえに、まりなはずっと、ほむらへの想いを隠し続けてきた。ずっと、ずっと、いつまでも、自分の胸の中だけにしまっておくつもりだったのだ。

そんなまりなの内心を見透かすように、フレアはまりなに近づき、耳に息が吹きかかるほどの距離感で囁きかける。

「ねぇ、まりな……私と一緒に、堕ちよ？」

「え……？」

「ネビリム様はどんなかたちの欲望（アイ）だって受け入れてくださるの。もちろん、女の子同士でも」

甘い、甘い――甘美な誘惑。

社会通念の前で苦悩してきたまりなにとって思わず、反射で頷いてしまいたくなる言葉だった。

頷いてしまえば良いと、まりなの中で悪魔が囁く。

「まりなだって、楽しんでくれたでしょ？　あんなに乱れて……」

フレアの言葉で思い出すのは、路地裏での出来事。ずっと、夢にまで思い描いていた行為を、もう我慢する必要もなく貪ることができる。妄想を繰り返してきたほむらの淫らな痴態をいくらでも見ることができる。そのためなら、世界の秩序なんてどうでもいいではないか、と。

ごくり、と。まりなは口の中に溜まっていた生唾を飲み込む。
いつもよりも何倍も粘りのある硬い唾が、喉を内側から圧迫していき、身体を下っていく。
「ね？　まりな……一緒に、ネビリム様のしもべになろう？」
再度の誘惑。フレアの熱い舌が、まりなの耳たぶを撫でて、
「ひゃうんっ❤」
痺れるような快感に、腰が砕けそうになったところをフレアが支えてくれた。
煩悶の中で、まりなは目を閉じる。
瞼の裏に浮かんできたのは、ほむらの笑顔だった。
だがそれはまりなが幾度も妄想してきた、まりなの望みを叶えてくれる淫らな天使などではなく、眩しいほどの元気な笑顔を浮かべる親友だった。
驚きと戸惑いで揺れていた心に火が灯る。
再び目を開けたとき、まりなの瞳はもう迷ってはいなかった。
「それは……ダメです……」
「どうして？　まりなだって、わたしとおまんこしたいでしょ？」
愛する親友（ヒト）の口から、おまんこという卑語が出たという事実は、こんな状況であるにもかかわらずまりなの子宮を昂ぶらせる。気を失っている間に何かをされたのか、あるいは部屋中に何かしらのガスでも充満しているのか、方法はわからないまでも、身体に何かしらの細工をされているのは間違いなさそうだった。
「わたしが好きなのは……ほむらちゃんだからです」

「私が本物だって、まだ信じられないの？」
「いいえ。だけどわたしが好きなほむらちゃんはどんなときでも元気で、どれほど絶望的なときでも諦めなくって……太陽みたいにあったかい、そんな女の子なんです」
きっぱりと口にすることで、まりなは自分の意思を確認する。
「だから……元に戻ってください。わたしの好きな――大好きな、ほむらちゃんに！」
フレアが本物であるならば、何が起きたのかについても路地裏でほむらが語ったとおりなのだろう。
どんな絶望的な状況におかれても、太陽のように周囲を照らし、笑顔で切り抜けるフレアが、こうして邪悪の使徒へと変えられてしまうほどの目に遭ったのだと思うと、まりなの心は引き裂かれるような罪悪の痛みを感じる。
快楽に蕩けきったフレアの瞳を、まりなは見つめる。
一度は快楽に負けてしまったのだとしても、フレアならきっと、正気を取り戻してくれる。そう信じて。
「思い出してください。セイントリリィとして一緒に戦ってきた日々を。優しくしてくれたみんなのことを。ネビリムの使徒は、そんなみんなの幸せを壊してしまうんですよ」
それこそが、フレアの――そしてまりなの戦う理由だった。
たとえ胸に抱いた想いを抑えこんだとしてでも、命を落とす危険があっても、守りたいものなのだ。
「まりな……」
一瞬、フレアの瞳が揺らいだように見えた。

まりなは更なる言葉を口にしようとして――

「んっ……❤」

直後、それを遮るように、フレアの唇がまりなの唇を塞いだ。

柔らかい唇を押し割って、熱い舌がまりなの口内へと挿入(はい)ってくる。

それを拒むことは、まりなにはどうしてもできなかった。

唾液をまとった長い舌が、まりなの口内を蹂躙してゆく。歯茎の裏を舐められ、唾液を流し込まれ、喉の奥まで責められる。同意などありようもないレイプキスに、しかしまりなの身体は否定しようもなく快感を覚えていた。

「まりなの唾、甘くておいしいよぉ❤」

唇が離れ、名残惜しむように唾液が糸を引いて切れた。

ジンジンと火照りを残した口内の感覚に戸惑ううちに、尖らされたフレアの唇がふぅ、とまりなの耳に息を吹きかけてくる。

昂ぶった身体に予期せぬ刺激を与えられ、まりなはビクンッ、と身体を跳ねさせた。

「ひぅっ❤」

「ふふっ……まりなったら今、軽くイッちゃったでしょ？　可愛い❤」

調教ははじまったばかりだというのに、既に完全にフレアのペースだった。

まりなはほんのわずかほどにも抵抗することはできず、フレアの与える快感を従順に受け入れ続ける。

「今度は……ここなんてどう？」

背後に回ったフレアは、まりなの胸に手をやった。改造されたフレアの淫乳とは比べも

のにもならない、ささやかな膨らみを、フレアは優しく撫で、そして揉む。それだけで、まるで電撃が走ったかのように、まりなの身体はビクビク震える。まりなの敏感な反応に気をよくしたように、フレアは両手で胸の柔らかさを堪能しながら、指先でまりなの小さな突起を摘まみ上げた。

「ひぅぅぅんっ❤」

まりなの背筋が仰け反る。

快楽によって硬く勃起しはじめたまりなの両胸の頂は、コリッコリッとした確かな硬さでフレアの指先に存在を主張している。

「やぁ、ああっ……そこ、だめぇ……」

「まりなったら本当にエッチなんだから……私なんかよりよっぽどネビリム様の使徒に向いてるんじゃない❤」

フレアの指摘に、まりなは顔を真っ赤にする。

恥ずかしい気持ちと、それ以上に、もっとして欲しいという欲望が同時に湧き上がってくる。

「ほむらちゃん、お願いです……もう許して……」

「ダ～メ♪」

懇願するも、フレアは意地悪く笑うだけで、まりなへの愛撫を止めようとはしない。

「ふふっ……気持ち良いんでしょう？　もっと素直になりなさい」

「い、いやぁっ❤」

否定するが、マリンの身体は正直だった。

コスチュームの上からでもわかるほどに乳首を尖らせ、股間はぐっしょりと濡れてしまっている。

「こんなに気持ちよさそうなのに嫌だなんて嘘つきさんね……そんな悪い子はお仕置きよ」

「っ……♥」

フレアの指先が、ショーツの上からもわかるほどに勃起したクリトリスに触れる。

「あっ♥　ああぁっ♥」

「ふふっ、まりなはここが弱いのよね」

路地裏での乱れ方を思い出したのか、楽しむように笑みを深めたフレアは、そこばかりを攻め立てるように刺激を与える。

「やめっ……あんっ♥」

「止めないわよ？　だってこれはお仕置きなんだもの。たっぷり可愛がってあげるわ」

「いゃっ、だめぇっ！」

言葉とは裏腹に、まりなはただただされるがままにしかなれなかった。身体はどんどん熱くなり、子宮がきゅんとうずくような感覚に襲われる。

「ほら、もう我慢できないんじゃない？　はやく楽になりたいでしょう？　ネビリム様の使徒になるって言いなさい？　そうしたら、もっと――ずぅっと、気持ちよくなれるんだよ♥」

耳元でささやかれる悪魔の誘い。

マリンはそれを振り払うように必死に首を振り乱すも、ほとんど抵抗と言えるような行為ではなかった。

悪戯っぽい笑みを浮かべて、フレアの舌がまりなの耳を舐める。
「ふわあぁっ♥」
不意打ち気味の耳への責めに、まりなはあっさりと甘い嬌声を響かせる。
フレアの舌はそのまま耳の穴の中へ侵入してくる。ぴちゃ、ぺろっと湿った音が響くたびに、マリンの脳は蕩けていく。
「まりなは強情だなぁ……それじゃあ……♥」
フレアの下腹部の紋様が妖しく輝いたかと思うと、変身したときと同様に光が集まり、形を作ってゆく。集まってゆくのはフレアの股間。小指のようにピンと勃起したいやらしいクリトリスに取り憑くように、光は集まるとその姿を現していく。
「見てまりなぁ♥　ネビリム様のお力で、生やせるようになったの……♥　素敵でしょう？　私のふたなりオ・チ・ン・ポ♥」
フレアの股間に屹立したのは、ネビュラの股間に聳え立つのと同じ、凶悪な牡棒（おすぼう）だった。しかしネビュラの股間のモノと、デザインも外見も何も変わらないはずなのに、フレアに生えているというそれだけで、不気味さや醜悪さの代わりに逞しさと愛おしさを感じてしまう。
「あ、ぁ……♥」
快楽責めによって昂ぶらされたまりなの身体に、フレアのそれはあまりにも魅力的に映った。無意識のうちに、まりなはゴクンと喉を鳴らしていた。
「ふふっ……欲しいの？」
そんなまりなの表情の変化を見逃さず、フレアが問いかける。

「だめ、そんなの……ダメよ、フレアぁ……」
釘付けになった視線をはずせないまま、弱々しく首を振るまりな。しかし、まりなの瞳は期待に潤み、その口元は物欲しげに半開きになっていた。
「うそつき……本当はほしいんでしょ？　なら素直になりなさい。そうすれば、もっとたくさん気持ち良くなれるのよ？」
「そんな、こと、言っちゃだめぇ……」
口では拒絶の言葉を紡ぎながらも、まりなの身体は従順だった。腰を浮かせて、自らフレアの股間を迎え入れようとする。
「ふふっ、まりなは上のお口よりも下のお口の方が素直ないい子ね。ご褒美をあげる♥」
フレアは自らの肉茎に手を伸ばすと、亀頭をまりなの股座に押し当てた。
「ひぅっ♥」
コスチューム越しに感じる、火傷しそうなほどの熱と硬さに、まりなはそれだけで軽い絶頂に達してしまう。
「ふふっ……挿入れてあげる、ねっ！」
言うが早いか、フレアはその剛直を一息に根元まで押し込んだ。
「ひぃぃぃんッ！」
子宮口を突かれ、あまりの質量に膣内が音を立てて軋むのを感じた。
「ひぐっ……あぁっ……♥」
想像を絶する快感が、マリンの全身を走り抜ける。
まるで自分の身体が作り変えられてしまったかのような錯覚さえ覚えるほどの衝撃に、

マリンの目尻からは涙がこぼれ落ちる。そんなマリンのことなどお構いなしといった様子で、フレアは勢いよく抽送（ピストン）を開始する。

「あっ、ああぁっ♥　らめれしゅっ……今動かれたら……んぅっ♥」

子宮を揺さぶられる快感に呂律の回らない口調になってしまうマリン。

「ふふっ……すごい締めつけ……気持ちいいわよまりな♥　まりなのおまんこ、だーい好き♥」

卑猥な言葉をかけられても、愛する親友に大好き、と呼ばれた事実はまりなの興奮に薪をくべていく。

フレアのピストンはますます激しさを増してゆく。

ぱんっ！　ぱちゅんっ！　肌と肌がぶつかり合う打擲音と淫らな水音が窓もない部屋に響き渡る。

「んひぅっ♥　あひっ♥　ひぅぅっ♥」

（こんなっ……こんなの知りませんっ♥　こんなっ♥　こんなぁっ♥）

激しく動くたびに揺れる巨乳が視界に入るたび、マリンの理性は吹き飛びそうになる。

今まで経験したことのない快楽が、脳髄を灼き尽くしてゆく。

「どう？　気持ち良いでしょ♥」

「だめっ、こんなのだめぇっ♥」

「嘘ばっかり♥　こんなに気持ち良さそうな顔してるのに♥」

「ちがっ……違いましゅぅっ♥」

必死で否定するも、身体は正直だった。子宮がキュンと疼き、子宮口にキスされている

ような感覚に、頭が真っ白になる。
子宮が精液を求めているのがわかる。子宮が堕とされているのを感じる。
「ほら、子宮が降りてきてる……♥　もうすぐ射精してあげるわ♥　ネビル因子たっぷり詰まった、特濃ネビルザーメン♥」
「やっ……やぁっ……♥」
マリンは必死で首を振り乱すが、身体はもう完全に屈服していた。子宮が熱を持ちはじめているのがわかる。フレアの熱い精子を早く受け入れたいと切望している。
パンッ！　パチュ！　パチュン！
肉と肉のぶつかる激しい音を響かせながら、二人は快楽の階段を駆け上がってゆく。
「あっ♥　あっ♥　あっ♥」
もはや喘ぐことしかできないマリンの身体は、フレアの肉棒を受け入れ、その快楽を貪っていた。
「出すよっ♥　しっかり受け止めてねっ♥　まりなぁっ♥」
「あっ♥　あぁぁっ♥」
ドピュッ！　ビュルルルーッ！
大量の白濁とした粘液がマリンの胎内へと流し込まれる。
「ひあぁあぁっ♥　出てりゅっ♥　ほむらちゃんの精子っ♥　精子くりゅぅぅっ♥　出されてりゅうぅぅぅ～♥」
子宮を満たす熱く粘っこい液体の感覚に、マリンは絶叫を上げて果てる。
ビクビクと身体が痙攣し、意識が飛んでしまいそうなほど強烈な快楽に溺れる。フレア

の巨根はドクンドクンと脈打ち、一滴残らずマリンの中に吐き出そうと躍起になっているかのようだった。

「あ、あ、あ、ああ……♥」

意識が高く打ち上げられたまま、下りてこられない。

ぬるま湯のプールに浮かんだような心地良い感覚に、まりなは漂い続ける。

フレアの長い射精が終わると、ようやくマリンの身体が解放される。脱力しきった身体が倒れそうになるのを支えたのは、挿入されたままのフレアの剛直だった。

「ねぇ、まりな……一緒に、堕ちよう？」

再三となる悪魔の誘惑。

堕ちろ、堕ちろ、堕ちてしまえと。注ぎ込まれたネビル因子が、子宮の奥からマリンに囁きかける。しかし、マリンはそれに抗うように首を振った。

「……だ、め……です……だって、わたしは、わたしたちは、魔法少女なんですから……」

途切れながらも、マリンははっきりと拒絶の意思を示す。だがそれは、先ほどまでの毅然とした意思に基づいたものとは違っていた。そうであると自分に言い聞かせなければ、簡単に傾いてしまうほどの、あまりにも不安定な天秤だった。

「ふふっ、まだ抵抗できるなんて……やっぱりまりなは強い子だね……でも……」

フレアは一度言葉を区切ると、マリンの耳元で囁くように問いかける。

「私ね、マリンのこと、好き。友達同士としてじゃなくって、好き。ネビュラお姉様のおかげで気付けたの」

「フレア……」

「それが認められない世界なんて嫌だよ。それともまりなは、私と一緒にえっちなことしたくない？　私とえっちなことしたの、気持ち悪かった？」

その言葉が、最後のひと押しだった。

「そんなの、ずるい、です……そんなこと、言われたら……」

ドクンッと。

下腹にふたつ目の心臓ができたかのように、子宮が高鳴る。

これ以上抗い続けることは、マリンにはできなかった。

「……ます……」

「なぁに？　マリン？」

とびきり邪悪で妖艶な笑みを浮かべて、フレアはマリンに問い返す。

「なり、ます……わたしも、ネビリムの……ネビリム様の、使徒にっ、フレアと、一緒にっ♥」

言い終わると同時に、マリンのコスチュームが変成をはじめた。

青と白の魔法少女の衣装が、ネビリムの使徒に相応しい淫猥な形状へと変化していく。

マリンの子宮がキュンと疼いた。子宮が熱を持ち、愛しい人の精液を求めて震えていた。



「ふふっ……嬉しい……これで私たち、ずっと一緒だね……♥」
「うんっ……♥」
「ねぇ、ほむらちゃん……♥」
フレア、ではなく、ほむらと、マリンは呼びかける。
「なぁに、まりな？」
フレアもまたそれに合わせて応える。
二人の視線が絡み合う。情念の籠もった、粘ついた視線。それを嫌がることなど、ほむらにも、まりなにもありはしなかった。
まりなは言葉を返す代わりに、目を閉じて、舌を出す。唾液に濡れて、ぬらりと輝く淫猥な舌先を。
それだけでほむらにはまりなが求めていることはわかった。
口の中に溜まった唾液をたっぷりとまとわせて、舌を伸ばす。
くちゅり、と。
二人が舌にまとわせた唾液同士が触れ合って、卑猥な音を響かせる。
だがそれも一瞬。次の瞬間には、舌と舌とは絡み合い、最初の音などままごとでしかないとばかりに、段違いに卑猥な響きを奏で始める。
「んっ♥　はぁっ……むっ、ちゅっ♥」
「ぅんっ……♥　あぁっ♥　ちゅるっ♥　ぁん♥」
舌と舌とを蛞蝓の交尾のように絡め、貪り合いながら、二人は互いの身体をまさぐってゆく。

言葉はいらない。
優しく、それでいてコールタールのように粘ついた情欲の炎が、二人を突き動かしてゆく。



◆シーン6

ネビリムの使徒の秘密基地。その一室に備え付けられた豪奢な椅子に、ネビュラは深く腰かけていた。

「ふふっ、んふふふふっ」

いつになく上機嫌に、ネビュラは笑みを漏らす。だがそれも当然のことだろう。

これまで幾度となく野望を打ち砕かれてきた宿敵に、完全なる勝利を手にしたのだから。

れろっ。ちゅるぅっ、と。

足元から、どこか淫らな水音が響いていた。

音の源はネビュラの足元に跪く、二つの人影。黒の光沢に輝く靴の爪先を、磨くように舐めまわす少女たち。

かつての宿敵にして、愛すべき妹分。そして都合の良い性玩具。正義の魔法少女セイントリリィの成れの果て——ネビリムの使徒、ネビルリリィであった。

うっとりと、極上のアイスキャンディを味わうように、二人はネビュラの靴に舌を這わせる。時折二人は視線を交わし、自分の方がより淫らに奉仕が出来ているとでも言いたげに、競って舌の動きを激しくさせる。

「んっ……♥　あぁ……ちゅぷっ♥」

「はぁ♥　んっ……れろぉっ♥」

舌を使った奉仕で興奮したのか二人の腰は浮き、肉感の増した尻を左右に振っていた。

擦り合わされたふとももの間から、にちゃあ、と卑猥な音が漏れて聞こえる。それだけで

二人が発情状態にあることは誰の目にも明らかだった。
「んふっ……♥　もう靴掃除はいいわ。あなたたちが可愛すぎて、あたしももう我慢の限界だもの」
ネビュラの言葉で、二人は次にくだされる命令を察したのだろう。発情しきった頬はさらなる熱を帯び、揺らされる尻は踊るようにその速度を増して、自分こそが選ばれようと無様で下品にアピールしてみせる。
「あら……二人とも、そんなにコレが欲しいのかしら？」
言いながら、ネビュラは自らの股間に手をやった。
既に硬く勃起したクリトリスを指先で捏ねてやると、ネビルエナジーが集まって、みるみるうちに腕ほどの太さの巨根へと変化する。淫堕神ネビリムに授けられたふたなりチンポだ。先走りに濡れた亀頭に、二人の熱視線が注がれる。吐き出される息は一呼吸ごとに熱を増し、口内を満たした唾液は口端から零れてゆく。
「それじゃあ――宣誓、してもらおうかしら」
ネビュラの言葉に、二人は目だけで意思を交わして頷いた。
「私たち、魔法少女セイントリリィは……」
「偉大なる淫堕神ネビリム様とその使徒ネビュラお姉様に楯突いたことを恥じ……」
「「ネビリム様の使徒、ネビルリリィとして、ネビュラお姉様に忠誠を誓います」」
相棒同士だからこそできる、息の合った宣誓。
「他の魔法少女たちも――」
「学校の友達も――」

「家族も――」

「「すべての人類を、この淫らな快楽に捧げます……♥」」

そうすることを想像したのか、二人の身体が興奮に震え、ふとももを淫らな蜜が伝ってゆく。

かつての宿敵の堕落したその様に優越感を抱きながら、ネビュラは邪悪に微笑む。

「ふふっ……上出来よ。それじゃあ今日は……マリンにしゃぶってもらおうかしら」

おねだりの成功に、マリンの知的な美貌がドロリと融ける。

飼い主に久々に再会した愛玩犬が尻尾を振るように、左右に尻を振りながら、凶悪な剛直へと顔を近づける。

漂ってくるのは、強烈なオスの生臭さ。剛直表面を覆う蚯蚓のような血管が脈動する様に、マリンはごくりと生唾を飲み込んだ。

「いいわよ、舐めなさい」

ネビュラの許可を受けて、マリンは華奢な手を添え、ネビュラの肉棒にしゃぶりつく。

根元から先端までに、自らの臭いでマーキングをするかのように、舌が唾液を塗りたくってゆく。血管の浮かぶ裏筋を舐め上げながら、大きく息を吸い込む。伝わってくる味と臭いに、マリンの顔は蕩けきっていた。

「すっかり上手になったわねぇ。あたしのふたなりチンポ、美味しいかしら？」

「ふぁい♥　ネビュラお姉ひゃまのふたなりおひんぽ♥　とってもおいひいれひゅ♥」

小さな口いっぱいにネビュラの巨根を頬張りながらマリンは答える。喋ろうとする舌の動きが凶悪なほどにエグれたカリ首を刺激して快楽を与える。鈴口からとくとくと溢れ出

す先走りを、自らの唾液を混ぜてごくりと飲み込むと、マリンの股から響く蜜の音が粘り気を増す。

「あぁ……マリンばっかりズルいよぉ……」

奉仕をしながら乱れる相棒の姿を前に、フレアも我慢の限界とばかりに自らの股座に指を這わせる。くちゅり、くちゅりと音を立てて乱れるフレアを、ネビュラは手招きする。

「もちろんフレアも頑張ってくれたものね。キスしてあげるわ。いらっしゃい」

「はい、ネビュラお姉様ぁ❤」

よだれさえも垂らしながら、フレアはネビュラに抱きつき、唇を重ね合わせる。

最初の頃の恥じらいが嘘のような、淫猥なキス。性経験の少ない男であれば、それだけであっという間に射精へと導かれてしまうほどの舌使いだった。

ネビル因子をたっぷりと含んだ唾液同士を、二人は交換し、交感する。



「いやらしいおっぱいねぇ」
「お姉様が改造してくださったんじゃないですか。それとも、牛みたいなドスケベおっぱいは嫌いですか？」
聞きながら、肉体改造によって肥大化した淫乳をネビュラの豊乳に押しつけるフレア。押しつけられた淫乳をネビュラが鷲掴みにすると、女子校生離れした淫乳はぐにゅりとスライムのように卑猥に変形して指を食い込ませる。
「その慎みもなにもないドスケベなおっぱい、フレアらしくて大好きよ」
ほんのひと月前までは罵倒にしか思えなかったであろうその言葉に、しかしフレアは歓喜によって身震いする。ぷっくりと乳輪ごと勃起した乳首がネビュラの手の平の内側でコリコリと転がされて甘美な痺れを発生させる。
「んぁぁっ❤　お姉様ぁ❤」
「そろそろ射精るわよ。二人ともぶっかけてあげる❤」
官能の最高潮に達して、ネビュラは椅子から腰を浮かせた。
ビクビクッ、と巨根が蠕動した瞬間、マリンはネビュラの意図を理解して咥えていた肉棒を解放した。
勢いよく勃ち上がった肉棒の先端から、びゅるっ、びゅるるるるぅぅぅっ！　とネビル因子のたっぷり詰まった邪精液がマグマのように噴出する。上を向き、大きく口を開けたマリンの顔を、口内を、コスチュームを、そしてフレアの身体を白濁が染めてゆく。
肌を穢してゆく欲望の熱さを感じながら、正義の魔法少女だった二人は絶頂に達した。

◆エピローグ

セイントリリィたちがネビリムの使徒に敗北してからわずか一週間。

世界はネビリムの使徒の魔手に侵されつつあった。

学校ではネビリムの使徒となった教師や生徒によるレイプが横行し、街を歩けばネビリムの眷属である怪人たちが女を犯し、あるいは攫っては快楽漬けにしている。

だがそこに誰も異を唱えない。犯された女性は抗う間もなく快楽の虜になり、犯される側ではなく、犯す側にまわっていったのだから。

当然、ネビリムの使徒に対抗するため、新たな魔法少女たちが他の地域から派遣されたのだが――

「あっ❤　あぁんっ❤　はぁぁんっ❤」

「ちんぽっ❤　もっとちんぽぉっ❤」

駅前の広場では、天使のようなコスチュームに身を包んだ少女たちが、甘い喘ぎをあげていた。

ほんの五分ほど前までは、決して屈しはしないと気丈に宣言したその口からは、今や嬌声と快楽を求める媚び声だけが溢れていた。

魔法少女の力と淫堕神ネビリムの寵愛。二つを併せ持つ二人の前に、魔法少女たちはあまりにも無力だった。魔法少女としての力を持つ二人は、魔法少女が本来与えられている抵抗力を無視してネビル因子を注ぎ込むことができたのである。

「あはっ❤　もう堕ちちゃった……歯ごたえないね、マリン❤」

「でも、その方がお姉様から早くご褒美いただけますよ？　フレア♥」

快楽に屈した魔法少女たちに、かつての自分たちの姿を幻視しながら、二人はネビル因子によって生やしたふたなりペニスを往復させる。

ずぷっ！　ずぷぅっ！　と卑猥な水音をマイクが拾い、街中にその敗北を喧伝してゆく。

淫らに堕ちた少女を嘲笑いながら、ネビルエナジーで作られたふたなりチンポに絡みつく粘液を振り払うように、二人は激しく腰を打ち付け合う。

やがて訪れた絶頂とともに、ネビル因子をたっぷりと注ぎ込む。

「私たち、ネビルリィがいる限り……♥」

「この街のすべては、ネビリム様の使徒の好きにさせてもらいます♥」

邪悪に歪んだ二人の姿を眺めながら、ネビュラはその端正な顔立ちを笑みのかたちに歪めるのだった。







































